

落第騎士の兄の戦嗜譚【一時凍結】

倉月夜光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

落第騎士の一輝の兄貴が色々やります

能力はチートですが時間や重力操るんだから有りだよなって思ってます

ぶっちゃけるとこの主人公戦闘狂、快樂主義者です

ヒロインNTRはないです（ステラ、珠雫）

出来るだけ面白い作品にしたいなーと思います（棒

更新は不定期ですが5話位までは早く上げようと思ってます

※原作を読んでいるかアニメを見た方が分かりやすいです。ほとんど説明省いてます

→解説入れます。単語、人物に関してはそちらを読んでください

目次

専門単語説明&原作主要人物・オリ主・オリキャラ紹介	1
1章：一輝、七星剣舞祭を目指す	
一輝のスタート	5
ステラと一輝、そして将季	11
新学期	18
解放軍	25
出番のなかった彼が出る回	32
エキシビジョンマッチ（試合前）	38
エキシビジョンマッチ（試合）	42
試合が終わって	47
一輝vs不遇なあの人	54
クリスマス・年末特別編	
（番外？）クリスマスな休日①	61
（番外？）クリスマスな休日②～回想Ⅰ	68
（番外？）クリスマスな休日③～回想Ⅱ	74
（番外？）クリスマスな休日④～回想Ⅲ	79
（番外？）クリスマスな休日⑤～回想Ⅳ	84
（番外？）クリスマスな休日⑥～回想Ⅴ	95
完	
この世界の日常	102

専門単語説明&原作主要人物・オリ主・オリキャラ紹介

単語解説

アイビースカプセル

・iPS再生槽： 戦いで負傷した箇所を修復する治療設備。切断された腕や足を10分程度で完治させることができる。所謂エリクサーやフェニックスの涙である。

・KOKトップリーグ：「KOK(King Of Knight)」は伐刀者同士が行う格闘競技のこと。この世界で最も人気のあるスポーツ。西京寧々は、その花形ともいえるトップリーグの現役スター選手である。

・七星剣舞祭：年に一度、7校の騎士学校合同で主催される武の祭典。ここで日本でもっとも強い学生騎士が決まる。麻帆良舞踏祭とかその辺りである。

・生徒手帳：破軍学園の生徒が所有する未来型端末。身分証明、財布、ネット、携帯電話などマルチな機能をもつ。七星剣武祭代表選抜戦の予定は、各生徒の生徒手帳にメールで送られてくる。BANNO Uな電子機器。欲しい…(´・ω・´)

・固有霊装デバイス：伐刀者の魂を具現化させた「魔法の杖」のようなもの。聖剣、魔弓、呪具、宝具など、使用者によってその形状は異なる。学生は許可なく校外で、固有霊装を展開することは禁止されている。要するに持ち歩ける武器。神器やどっかの魔法の杖ですねわかります。
・伐刀絶技ノウブルアーツ：固有霊装を媒体として用いることで、伐刀者が行使する異能の技。基本いくつもある。必殺技、かっこいい技。

・伐刀者ブレイザー：己の魂を武装として顕現させ、魔力で異能の力をあやつる者のこと。1000人にひとりと言われる特異存在である。

・魔導騎士：国際機関から能力を使う認可をうけた伐刀者のこと。国際機関から認可をうけた専門学校を卒業することで、魔導騎士の資格と免許を得ることができる。

・ランク：伐刀者としての能力を評価する基準。総魔力量などの能

力値から総合的に判断され、各騎士は最高のAから最低のFまで振り分けられる。ただし、剣術の腕や体術の冴えはランクの評価項目にはふくまれてない。

人物紹介

・黒鉄一輝 M 16. 17 (原作で出て来てない…はず)

ランクF

固有霊装…《隕鉄》(日本刀)

伐刀絶技…《一刀修羅》(自らが持つ全ての力を1分間に凝縮して使いつくし、己の能力を大幅に強化する。体力の消耗が激しい大技で、1日1回しか使うことができない。)

原作主人公、この作品でも持ち前の前向き修羅精神で頑張ってくれるはず。

・ステラ・ヴァーミリオン W 15. 16 (アイトントノウ!!)

ランクA

固有霊装…《妃竜の罪剣》(大剣)

伐刀絶技…《天壤焼き焦がす竜王の焰》(ステラが用いる最強の伐刀絶技。妃竜の罪剣を100メートルを超える光の剣に変え、あらゆる物を焼き尽くす。)

原作ヒロイン、なんか影が薄くなってきているが皇国の第二王女。作者はこの“第二”が気になる(一が問題起こす予感…!) 世界一の魔力保有量を誇る十年に一人の逸材。

・神宮司黒乃 W ??

ランクA

固有霊装…『二丁拳銃』名前は出ていない

伐刀絶技…《禁技・時空崩壊》(空間の時空を滅茶苦茶にひねって

空間ごと崩壊させてしまう大技。ちなみにその空間は元に戻らない。)

破軍学園理事長、元KOK『A級』リーグ選手、元世界ランク3位。結婚を機に引退。元の名前は“滝沢”。なんやかんやいい人。

・黒鉄珠雫 W 15・16 (ry)

ランクB

デバイス
固有霊装：《宵時雨》(小太刀)

ノウブルアーツ
伐刀絶技：《障破水蓮》(水の壁。弾丸も通さない硬度で、純水にすることで電気も通さない。)

一輝の妹、一輝ラブ。この作品では将季のことは普通の兄として慕っている。他の人は相変わらず嫌い。黒鉄家絶対許さないwoman。

・有栖院凧 W ??

ランクD

デバイス
固有霊装：《黒き隠者》(鈍色に光るダガーナイフ)

ノウブルアーツ
伐刀絶技：《日陰道》(影のなかに空間を作りその中を移動できる能力)

能力は“影”の操作。

珠雫のルームメイト。ランクDながらも高い戦闘能力を誇る。

誰がどう見ようとオカマ。本人曰く“男の身体に生まれた乙女”だそうです。

※オリ主ネタバレ注意

・黒鉄将季 M 17

ランクB

デバイス
固有霊装：《桜花火》(拳銃『桜花』と小太刀以上刀以下の中間の長さの刀『花火』(片手で扱える)の一对になっている霊装。銃で撃つと

魔力を吸収し刀に纏わせることが出来る。世界で初めての形が対でない二つのデバイス。片方ずつの使用も可能)

ノウブルアーツ
伐刀絶技：《遠近世界》(約一メートルくらいで相対距離が変わる一種の結界。この中では使用者である将季以外距離感をつかめない。)

能力は“距離操作”

黒髪黒目、実は一輝より女顔だが性格などのおかげで完全に男と認識される。

珠雫、一輝の兄、王馬の双子の弟。

破軍学園の三年生。裏話的な感じだが学院には入学する気はなく、奨学金と多少の交渉（一人部屋、能力の行使許可）を経て入学。中学時代は世界中を旅していた。実はその時の能力使用、無断入国で指名手配されていた時期があったが黒鉄家からの圧力、本人が悪事に使っていないかったことからこれは撤回された。なお、指名手配中も捕まることはなかった。

実はさらに隠していることも・・・。

オリキキャラ紹介

イングナ・ライトベル W 19

固有霊装：《デバイス実光剣フォトンブレイド》（一見ただのペンライトだが、その光は魔力で出来ており、物質化して即座に剣として扱える。暗器としても優秀）

伐刀絶技：《ノウブルアーツ??》（作中で出てきます。大体は光の操作によって出来ることです）

能力は“光操作” 応用性が非常に高く周囲の光を扱えるので様々な使用方法がある。アリスのように影の操作だけでなく、光の“物質化”まで出来るのでかなりの高位能力操作力があるともいえる。

将季の旅の同行者。魔導騎士として登録してないのでランクはないがBランク相当の魔力保持者。

詳しい説明は今後作中で、お楽しみに。

1章：一輝、七星剣舞祭を目指す 一輝のスタート

「なんで…なんでこんなに努力しているのに勝てないんだよ……!?」
相手は自分の対面で息を上げている。

それに対して自分は平然としている。今は魔導騎士同士の決闘中。自分と相手との勝負の真つ最中だ。それでなぜ自分がこんな思考をしているのかと問われれば正面にある男の姿がその理由に他ならぬ。

最初はこの男も格好よく登場したものだ。

「この俺が今まで積み重ねてきた努力の全てをもつて貴様を倒す!! 覚悟しろ!!」

なんてこちらに向かつて言ってきた。そのときはへーそうですかー、としか思わなかったが今は違う。こいつは裏でどれだけの努力をしてからその言葉を使っているのだろうか。世間一般には“努力は無意味”という意見。逆に“努力さえすればどんなことも可能である”と語る人物もいる。実際様々な意見があるだろう。

今のこの時代、この《魔導騎士》が世間の主な注目を集める時代において《伐刀者》^{ブレイザー}には様々なことが求められている。それは“努力”もそうであり、また“才能”もそうである。当たり前であろう。《伐刀者》^{ブレイザー}とは己の魂を武装——《固有霊装》^{デバイス}として顕現させ、魔力を用いて異能の力を操る千人に一人の特異存在。かの者たちはその説明のとおり“魔力”を用いて戦闘する。その総量が少ない騎士は強い異能の力を扱えないし、戦闘において“努力”という自己を高める訓練も必須である。

その“努力”は本当に自分の限界までしたのか?“才能”の差があるから負けても仕方ないとか、“精一杯”努力しましたとか考えて途中で投げ出したりしていないだろうか。

少なくとも自分、俺はそんな“努力”を突き詰めた人物を一人知っている。幸い、自分には才能があった。が、その人物には才能なんて

無かった。いや、《ブレイザー伐刀者》である以上必用最低限の才能はあったのだろう。しかし、逆に言えばそれしかなかった。魔力の量は少ないという言葉を突き詰めたように少量。唯一頼れる《ノッブルアーツ伐刀絶技》もありふれる最低レベルのもの。しかし、彼は“努力”をした。それは並ならぬ努力だった。語りきれないほどの努力だった。俺はその“努力”に對して敬意を持っていて、彼は実際にそれだけのことをなした。今はどこにいるのか知らないがきつと自己鍛錬でもしているのだろう。その男に負けない努力をしてからそんなセリフは使ってもらいたい。生半可な努力で“努力”という言葉汚して欲しくない。

「それで、終わりか？」
問いかけたが彼が立ち上がることはもうなかった。

——これが二年前のこととなる——

「おい！聞いたか！！あのヴァーミリオンのお姫様が模擬戦するらしいぜ！！」

「ええ!?それって今年入学してきたっていう!?」

「まじかよ!!おい早く見に行こうぜ!!」

周りが騒がしい。ここは先ほどまでさわやかな風の吹き抜ける場所だったはずだ。自分がいるのは木の上、実際には中庭の木に登って寝ていたところである。

「それで、どこで模擬戦するんだ？」

「たしか第三訓練場だったと思うぜ」

「よっしゃ、いいいい!!」

ああ、と納得する。先ほど耳に入ったステラなる人物は確か国のお姫様だったはずだ。さすがに連日ニュースで流されると覚えている。どこから広まったのかは知らないが新入生平均の約30倍の魔力を誇るバケモノらしい。たしかにそんな人物が模擬戦をするとなると大きな注目を集めるだろう。

まあ、自分は少し興味があるくらいだし見に行かなくてもいいかと思えば寝ようとしたとき、

「それで、相手は誰なんだ？」

「ああ、黒鉄っていう一年らしい」

「はあ？俺去年そいつと同級生だったけどそいつ授業を受けられなくて留年したやつだぞ？勝負になるかよ」

「そうなのか。ま、ステラさんを見に行こうぜ!!」

「そうだな」

ほう、今聞こえたのはなかなか興味深いことだった。

「そうか、あの弟が才女に挑むか…。見に行ってみるか」

そうつぶやくと木の上に立ち木のでっぺんにジャンプする。このくらいのことなら魔力を持っている《伐刀者》^{ブレイザー}なら誰だってできることだ。

「第三闘技場はあっちだな…」

その言葉の後にはその木の周辺には人影が無くなっていた。

☆

『あの子がヴァーミリオンの《紅蓮の皇女》か!』

『すげえ美人じゃん』

『髪の毛が綺麗…燃えているみたいで素敵…』

『でも相手の方は誰だ?』

『…あれって、留年した黒鉄じゃないか』

『まじかよ、兄と違って才能無いんだろ?』

『なんでそんな人がステラさんと戦うの?ステラさんって天才なんじゃない?』

『知らないよ。…だれか、去年クラス同じだったやついないか?いたらどんな騎士か教えてほしいんだけど』

『俺去年同じクラスでしたけど、あいつ能力基準が受講するために足りなくて実戦見たことないすよね』

『訓練の基準にも満たしてないって…ひどすぎないそれ?』

『なーんだ。つまんね。』

観客席からは様々な声が聞こえてくる。正直興味のかけらもない。

一輝は強い。それが《紅蓮の皇女》に通じるかが楽しみだ。

その後、数回のやり取りを終えて模擬戦が始まった。押しているのは前評判通りステラ姫。観客からは予想通り失望したような声が上がっている。が、このドーム内に二人だけ事実を把握している人物がいた。

(なによ…これ…)

(やっぱりこうなるか)

(あたし…あしらわれている…!!)

(一輝はいつも通りみたいだな)

ステラは自分が実際に相対しているため、観客席の唯一試合を真面目に見ている男はその剣を知っているため、何が起きているのか分かる。

そして、試合開始から五分弱、一方的な試合に変化が起きる。

『おい、なんか皇女様を押されてないか…!』

その言葉の通り、剣と剣との勝負でステラが一輝に押され始めたのだ。そのタネは簡単。一輝の剣術《模倣剣技》だ。一輝は剣術を完璧に理解することが出来る。そして完璧に理解できるということは、それを上回る剣術を作れるということだ。その剣術を使う一輝にステラの剣術が勝てる道理はない。

「ハアアアアア!!」

一輝は咆哮と共に《固有霊装》である《陰鉄》の刃を打ち下ろした。そこで一輝の勝ちが決まる。と、思われた。

『あれを見ろ!!』

一輝の打ち込みはステラの右肩に振り下され、——そこで止まった。

一輝の全力の一閃は、ステラに何らダメージを与えられなかっただ。

それも当然と言えば当然、ステラの魔力の総量はAランクでもトップ。そんなステラは前提としてその魔力に身を守られている。だから

ら騎士は強い。そして、一輝の騎士としてのランクはFランク。魔力量も平均の約十分の一というものである。つまりステラは鋼鉄のフルアーマーに身を守られていて一輝は細い針金でステラに斬りかかった。そんなことをしてもアーマーに阻まれるのがおち。つまりはそういうことである。

ステラと一輝は向かい合って話していた。恐らくステラは一輝を認めたのだろう、強者と。ステラはドームの端まで跳躍し一輝との間をあける。そして、

「蒼天を穿て、煉獄の焰」

その瞬間、剣に宿る炎がその光度と温度を一層猛らせ——もはやその在り方を炎ではなく、光の柱に変えドームの天井目掛けて伸びていった。

そして、その才能と言う名の理不尽で全てを焼き付くす……！！

「《天壤焼き焦がす竜王の焰》——！！」

その刃が降り下ろされた。

観客は悲鳴を上げて逃げ出した。しかし、そんな中でほほえましく見守っているのが二人。

（長えーな、だいたい100mくらいか）

（ここに彼が居てくれて助かったな。でなければこの闘技場ごと焼き払われてた）

焰は観客席に届かなかった。

そもそも始めにこの剣が出現したときに天井をぶち抜かなかったのは何故か。そして、学園長である黒乃が慌てたり顔を歪めなかったのは何故か。簡単である。なにも被害は出ていないのだから。もちろん闘技場のリング中は焼き焦げたりしている。しかし天井を始め、闘技場の施設は何も壊れたりしていないのである。

ステラと一輝は勝負に夢中で気づかない。今は一輝が《一刀修羅》を用いて戦闘継続中である。ステラは巨大な光剣を振り回す。それを一輝が回避する。そして——

一輝がステラを斬った。

「そこまで！勝者、黒鉄一輝ッ」
試合が決着した。

ステラと一輝、そして将季

「……………ん、っ」

学生寮一室で一人の少女が目を覚ます。

「目が覚めたか。ヴァーミリオン」

その少女に声をかけるのはベッドの側に座り、煙草をふかしているスーツ姿の黒乃だった。

「理事長先生……………ここは？」

「君の部屋だ。倒れた原因は《幻想形態》の固有^デ靈装^{バイス}に殺傷されたことによる極度の疲労だからな医者やiPS^{カプセル}再生槽を使うような事態ではないから、自室で休ませていたんだよ」

少女、ステラは現在の状態を寝ぼけた頭でようやく理解し始めた。

「……………ということは、あれは現実にあったことなのね」

ステラは気分が重くなった。

当然だろう。自分は、Aランク騎士なのだ。十年に一人の天才と言われた自分がよりもよってFランク騎士に負けたのだ。それも、言い訳も思いつかないほどの惨敗を喫した。気が重くならないわけがない。

「はあ。久しく忘れていたわ。負けるって……………こういう気持ちなのね」

「まあ気に病むな。黒鉄はハンデ戦とはいえこの私にも勝っている男だ。現時点でお前が勝てる相手ではないよ。」

「元世界ランキング三位の《世界時計》^{ワールドクロック}にも勝ってるって……………。なによそれ」

あの男は化け物か。

いや、それも今更かとステラは思い至る。

一分で自分を使い切る。それはどんなに過酷で、尋常ではない集中力が必要なことだ。その有様はまさに修羅。化け物そのものだ。

(あっ)

そこでステラは思い至る。

「理事長先生。あいつは、——無事なの？」

黒乃はその言葉に頷く。

「大丈夫だ。お前よりは重傷だが、命に関わるようなことではない。」
当然だが、人の体は一分間で全力を使い切るなんて風にできていない。そんなことをすれば体にかかる負担が半端なく大きいのだ。

ベッドの上にはかすかな寝息のみ分かる一輝がランニングシャツ姿で寝ていた。

「まあ、自力で部屋に戻って、制服を脱ぐくらいには余力を残していたよ。」

黒乃はあきれた風につぶやく。

「理事長先生。この男は一体何なんですか？」

「何、とは？」

「とぼけないでください！これほどの男がFランクの留年生なんておかしいでしょう!?!?どういうことなんですか!」

「そうはいってもな、Fランクは妥当な判断だぞ。何しろランクは^{ブレイザー}伐刀者としての能力を評価している。実践力……つまり剣術や体術は評価項目に存在しない。なにしろ本来これらは超常の力の前に無力なものだからな。それが世間一般の考え方だ。だから現状、黒鉄を評価できるシステム自体が無いんだ。まあ、その項目を省いた黒鉄は……最低だ。こういうのはあれだがここまで出来の悪い生徒も珍しいくらいだよ」

「……まあ、それは分かりますけど……、でも『留年』は納得できません」

「どうして？」

「アタシは皇族です。国家に強い魔導騎士がどれほど大切な物か、良く知っています。そしてこんなに戦える人間を単位が足りないなんて理由で留年させるなんておかしいです」

その言葉を聞いて黒乃は苦笑いを浮かべ、語る。

曰く—— 一輝の実家は大战の英雄である『サムライ・リョーマ』、黒鉄龍馬の家であると。

曰く—— 黒鉄本家が学園に『黒鉄の家を出奔したはぐれ者、黒鉄一輝を卒業させるなど圧力をかけたと。』

曰く—— 前学園長が承認し、ありもしない実践教科を受ける最低能力水準などというありもしない規定を勝手に作り、一輝を授業から閉め出したと。

ステラは焼けるような怒りを覚えた。 “それが親のやることなのか”と。

黒乃は同意を示し、そしてそれでもあきらめなかった一輝を褒めたえた。

「まあ、それが黒鉄一輝という男だ。……さて、あと話したいことがあったんだが」

「はい、なんですか」

ステラは純粹に疑問に感じたただけだったがこれはかなり大きな問題だった。

「お前、学校を破壊するつもりだったのか？お前の伐刀絶技ノウブルアーツ、スタジアムどころか周辺一帯を焼き尽くす勢いだったんだが？国際問題でも起こしたいのか？」

「あつ……………」

ステラは思い出す。自分の使った焰の剣は100mを越える長さの炎だと。そんなものを学園の中で振り回すとどうなるか……、想像もしたくない。

「はあ、今回は何もなかったからよしとするが、今後気を付けろよ。直せるは直せるが、大変なんだぞ」

「すつ、すいません！」

ステラは慌てて頭を下げて、気付く。

「え？何もなかったんですか？あ、学園長がやってくれた？」

「いや、今回は観客が自分の判断で能力を使ってくれた」

そんなことが可能な伐刀者ブレイザーがいるとは、さすが日本の学園、レベルが高い。

ステラが一人感心していると、

「りじちよー、どうっすか？」

一人の男が部屋に入ってきた。

「ああ、今お姫様が目覚めたところだ。で、煙草は？」

「ほいほい、俺が買うのって店で色々まずいと思うんだけどなあ……」
そう言いながら黒乃へ煙草を投げる男を見てステラは、

「あの、あんたは？」

「ああ、俺？ 黒鉄将季ってんだ。そいつの兄貴。三年生。よろしく、オヒメサマ」

ステラはそこで疑問を持つ。

「あれ？ さっきの話だと一輝は本家から嫌われてるんじゃないかかったけ？」

「いや、子供までそんな思想にそまってどうするのよ。俺は俺だし、弟を邪険に扱うかよ」

確かにその通りである。

「ステラ・ヴァーミリオンです。よろしく、センパイ」

ステラも分かったところで黒乃が言葉をはさむ。

「そいつがお前の器物損害を防いでくれた男だ。礼くらい言っておけよ。」

言うと、煙草に火をつけふかし始める。どこまでもズレ無い女である。

「ああ、そうだったの。ありがとう、助かったわ」

「いいや、いいよそんなことあ。俺もあの勝負は最後まで見たかったからな。ま、そんなに悪く思うってんなら強くなってくれや。俺、強い奴と戦うのが好きなのよ」

「へえ、弟と同じで強いのかしら？」

ステラは挑発的に返すが、黒乃が煙草の煙を吐きながら答える。

「そいつは一昨年の七星剣舞祭優勝者だぞ。強いに決まっているだろう。しかも、圧倒的すぎて出場停止扱いだ。」

「……………はい？」

ステラは耳を疑った。

七星剣舞祭とは日本にあるプレイザーの学園に通う騎士の卵たちがその学生騎士ナンバーワンを争いあう大会である。当然、日本各地から選りすぐりの猛者が集う。そこで出場停止なんてどういうことだら

うか。

「いやあ、楽しくてちよつとテンション上がっちゃってね、腕斬り落したり体に風穴開けちゃったりして、今では反省しているけどな!!」
はっはっはと笑いながら話す内容は思ったより生臭かった。少なくともステラが引くくらいには。

「ま、今のお前では勝てる相手ではないよヴァーミリオン。そいつは《比翼》と千日手に持ち込める男だ」

ステラは息をのむ、ビツクリ、驚いたなんて言葉で表せないほどの衝撃を受けた。

《比翼》とは強すぎるため指名手配されながら捕らえられるのをあきらめられた犯罪者のことだ。世界各国が逮捕は無理とあきらめた相手に引き分けに持ち込むって……。

「まあ、能力の相性がいいからな。流星に真正面からぶつかり合ったら勝てねえよ。ま、実際に負ける気はねえけどな」

笑いながらそんなことをいう将季の顔には隠し切れないくらいの戦意が浮かんでいた。

「なんていうか、黒鉄家って、化け物の巣窟なのかしら……」

一輝と同室になるにあたり、さっそく不安になってきたステラであった。

☆

その後、黒乃と将季が部屋からいなくなり少しばかり経ち、一輝とステラが原作通りの対面をした。つまり天井に頭をゴツツンこ、床にズドーンである。

「ステラさん、頭は大丈夫？」

「大丈夫だからその聞き方はやめて、あたしがおかしい人みたいじゃない」

ステラはため息をつきながら頭をさすり、

「その、一輝のこと理事長先生から聞いたわ」

「僕のこと？」

「一輝が今まで家からどんな扱いを受けていたのか、っていうこと」

一輝は黒乃に文句を言いながらもそんな中で努力する理由を話す。

一輝は幼いころから居ないものとして家族に扱われてきた。

そんな中、ある元旦の日、家に一家全員が集まっていたがその中に一輝の居場所はなく、家にいることも辛くて家を抜け出し裏の山に入っていた。

そこで一輝は遭難、だが誰も助けに等来ない。悲しんでくれるのはただ優しくしてくれた兄と妹の二人くらいである。もう、いつそ――

そんなときに出会ったのが『サムライ・リョーマ』、黒鉄龍馬であった。

彼は一輝に、『その悔しさを捨てるな。その悔しさは、まだ一輝が自分を諦めていない証拠だから。』――と言った。

「そんな、彼みたいになりたくて、僕は魔導騎士になろうと思ったんだ」

ステラはその思いを尊敬した。

自分は才能があつたから努力出来た。強くなれた。そして認められた。だが、目の前の一輝はどうだ？才能が無い、周りから見放される、存在さえも認めてもらえなかった。それでも、自分は強くなれると信じて、努力、修練を積み重ね、今の境地に至ったのである。

「そうね、あたし以上の負けず嫌いがいるなんて知らなかったわ」

そしてステラは聞きたいことがあることを思い出す。

「そうそう一輝のお兄さんの将季ってどんな人なの？」

その瞬間、一輝の顔が強張った。

「に、兄さんかい？もしかして勝負を挑まれたりした……？」

「い、いや。強くなれとは言われたけど……」

「ふう……良かった。いや、兄さんは基本いい人なんだけどいわゆる“戦闘狂”なんだ。強い人とは片っ端から戦いたいみたいなの。僕なんかを認めてくれている人でもあるんだけどね。いい、人……なんだけどね……」

「そ、そうなの……」

その様子にかける言葉が見受からないステラであった。

「そ、そういえば!!将季の能力ってどんな能力なの?」

「ああ、兄さんの能力は分かりやすい”距離”を操作するのさ」

距離とは皆が知っている概念である。この地点Aから目標の地点Bまでの離れている度数。それをいじることができる。つまり、自分と相手の距離を離したり、逆に縮めて一瞬で接近することが可能なのである。

「だから兄さんは基本的に攻撃を喰らわない。それに加えて本人の固有^{デバイス}霊装での攻撃、武術も修めている。本当に強い人だよ」

「距離を……、だから今日は助かったのか……」

「ステラさん、どうかしたの?」

「いや、今日観客席とか天井をぶち抜きそうになったんだけど将季のおかげで被害が出なかったのよ。今度改めてお礼言わないと」

「兄さんがか……」

「どうかした?」

「いや……、また勝負を仕掛けられるかなと考えていただけだよ……」

黒鉄一輝の受難は、まだまだ終わりそうになかった。

新学期

四月——それは出会いの季節である。
たくさんの別れを経て、成長し、そして新たな物語のスタート地点である。

今日は学校の始まり、始業式がある日。
そんな日の朝、この物語の主人公、黒鉄将季がとっていた行動とは……。

☆

「すう…すう……」

ある部屋の中、一つのベットの上で規則正しい寝息がたてられている。部屋は暗闇に閉ざされ、朝日など欠片も入ってこない。そんな部屋の中で、

プルルル、プルルル

携帯の着信音が鳴っていた。

プルルル、プルルル

しかしベッドの主は気付いた気配がない。

プルルル、プルルル

携帯はしっかりとその機能を果たしているのだが、この男は気付いた気配もない。

プルルル、

ようやく止まったかと思つたその時、

「遠慮はいらないんだな……。——起き

ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!! 黒鉄えええええ

ええええええええええええええええええええええええ!!!」

「わひゃっほい!!??」

轟音が響いた。

☆

「まったく、何故に貴様は理事長自ら起こされなければいけないのだ……」

「すいませーん。でも反省も後悔もリヨ」

理事長室で朝から怒られているのは将季である。

将季は新学期の朝から寝坊、そしてそのまま寝ていたのだが、黒乃にそれが知らされ結果、生徒手帳の最終機能である強制通話モードにより起こされたというわけである。

なぜこの時神宮司が起こさなければいけなかったかというのと、この男、寝るときに快眠のために周りとの距離を数キロ開けるのである。ただし、これは大きな魔力を声に籠めてぶつけければ解けるようになっていたのでわざわざ理事長自らこのようなことをしたのである。

ちなみに去年も同じようなことが多くあり、学園の真面目な教師一同頭を抱えていた。今年の新理事長として神宮司黒乃、臨時講師としてKOKリーグトップリーグの選手である西京寧々、新入生としてステラ・ヴァーミリオンがAランクとして学校に存在するが、現在暇ではないが手が空いていたのが黒乃だけだったのである。

「それで、何か言い残すことはあるか……!」

「すいませんした明日からはきちんと登校します」

銃を向けられて戦々恐々しながら将季は答えた。

「はあ……、今日はもう許してやるから明日からはきちんと来い、分かったな」

「イエッスサー。ま、今年の破軍学園はなかなか楽しそうだしいいですよ。かなり真面目に学校に来ることにします」

この男、特待生として学校に来ているのでぶっちゃけ今すぐやめて世間で言う中期期にしていた世界旅行を続けてもいいかななんて考えていた。(小学生の頃に通信教育で中学の義務教育の単位までしっかり取っていたのである)

「楽しそうね……粒ぞろいなのは分かるが、お前が本気で戦えるやつがいると思っっているのか?」

「今は無理でしょうね。ぶっちゃけ、一年生には生徒会長の東堂に勝

てるやつはいないでしょうし。でもステラ姫も一輝もまだ成長経過だし、ステラ姫は才能の“さ”の部分も出し切ってないでしょうし。七星剣舞祭頃には今の倍以上強くなってるでしょ」

将季は弱い者いじめが好きではない。力と力、技と技の競い合いが好きなのだ。より強く、より巧く、より上の次元の戦いを……。それを求めているのが、黒鉄将季という男なのだ。

「真面目に学校に通うようなら結構。今日はHRだけだしまう終わっているだろう。帰っていいぞ」

「リョーカイつす。失礼します」

将季は理事長室を出て、

「なんか面白いことが起こっている予感……」

その快樂主義者の本能で面白いことを嗅ぎ付け、そこへ向かうのである。

「……仲良くしようよ。これから一年、一緒にやっていくクラスメイトなんだからさ」

一輝は目の前の少年に優しく微笑みかける。だが、それは当の本人からしたら死神の微笑みに見えた。

まあ、それもわかるだろう。この少年、ステラに勝ったという一輝を妬んで五人がかりで挑んだところ固有^{デバイス}霊装も使われず、あっさりとなり力化されたのだ。当然、自分たちは固有^{デバイス}霊装を使っていた。

そんなこんなで周りの生徒が若干怯えながら見守っていたところ。

パチ、パチ、パチ……

教室の入り口から、拍手が聞こえてきた。

視点変わってその教室に到着した将季。入った瞬間、

「「そんなわけあるか!!」」

と、一学期一年生が出すのが珍しいくらいの心が一つになった声が聞こえてきた。

将季の目線の先にあつたのは床に座っている一輝とその上にいる珠雫。そしてそれにつつこんでいる一年一組の生徒諸君だった。

「なんだ？今年の一年は息がそろってるじゃねえか」

そんな空気を壊した一言に目を向ける一年生一同。その中でも一番リアクションが大きかったのは自称&実際に活動している新聞記者カガミンこと加々美だった。

「あ!!あなたは、一昨年七星剣舞祭で優勝して、圧倒的過ぎて出場停止になった黒鉄将季さん!?!」

その言葉に周りがざわめく。

『おい、黒鉄将季って……』

『ああ、あの“ディスタンサー虚離奏者”だよな』

『うっそ、本物!?!』

『まじかよ……』

『ていうか一輝君と珠雫さんと同じ名字だけ……』

「おお、そーだけど。その将季さんに何かようか？俺は弟がトラブってる面白空間に突撃しにきたんだが」

「に、兄さん！面白空間ってなんなんだよ!?!ていうか助けてくれ!?!」

「いや、それは珠雫を放ってたお前が悪い。俺はパス」

「いやいやいやいや、兄妹！僕と珠雫、兄妹だから!?!」

「さすが将季兄様は分かってますね。そんなことよりお兄様、珠雫をもっと感じてください……」

そして再び交わろうとする一輝と珠雫の唇。それが触れ――

「だめー！ー！っ!!」

そうになつたすんでの所でステラによって引き剥がされた。

「ちよつとイツキー！なにアンタまでのってんのよ!?!そしてシヨーキは兄として止めないの!?!」

「ご、ごめん！ていうか助かった！ありがどうステラ!」

「俺は快樂主義者なので面白そうなことは傍から眺めさせてもらう主義だ。逆らうなら能力を使うことも辞さない」

一輝の唯一の味方はステラ、将季はいつも通りだった。

「あなたはなんなんですか？これは私とお兄様の兄弟間での問題で

珠雫の微笑みに一輝の脊髄にぞくんと怖気が走った。

「なんでそんな嘘をつくんですかお兄様。お兄様がそんなことするなんてありえません。だってお兄様は珠雫を悲しませるようなことしないもの。お兄様は珠雫を傷つけるようなこと言わないもの。そんなのお兄様じゃないもの「あ、あの、珠雫………さん？」ああそうか。わかりました。きっとその女に弱みを握られて、無理やり付き合わせているんですね。そして私に心配させないためにその事実を伏せているんですね。ええそうに決まっています。それ以外にあり得ません。理論的に考えてそれ以外にあり得るはずがないのです「いやちよつと僕の話を」なんて可哀想なお兄様。なんてひどい女なの。これだからお兄様が家を出るのは反対だったんです。だってお兄様はすぐくカツコいいんですもの。格好良くて魅力的なんですもの。だからどうしてもこういう胸にばっかり栄養が行っている頭の弱い淫乱が寄ってくるんですよ「ねえ珠雫お願いだから落ち着いて話を」いえお兄様は悪くないんです。お兄様を責めているわけではありません。お兄様はただ素敵なだけです。ただ素敵すぎるだけなのです。悪いのは全部この女。悪いのは全部この女。悪いのは全部この女。だから珠雫が今、お兄様を自由にして差し上げます。飛沫け——《宵時雨》」

「ちよつと珠雫、話を聞いて!?!別に僕は弱みなんて握られていないから!?!ねえ聞いている!?!」

「傅きなさい、《妃竜の罪劔》」

「つてなんでステラもやる気満々なの!?!」

「悪いけどアタシはイツキと違って、情けをかけるほど甘ちゃんじゃないの。やるっていうなら相手になるわ」

そうして二人は互いしかその瞳に映さず、

「はいみんな廊下に出てー。ここにいたら多分死ぬよー」

「いんや、俺が守っちゃるよ。このままだと学園に被害が出そうだしな」

「あ、そういえばいた将季先輩!話を伺ってもいいですか!?!」

「いいけど、今からが面白そうだぜ?」

背後では既に順応したジャーナリストと快樂主義者。流石と言えるだろう。

そしてふたりは――

「……………デブ」

「ブス……………」

「殺すツツ!!!!」

机や椅子が木っ端微塵にはじけ、全力戦闘が始まった。

解放軍

その日、彼はたまたま破軍学園の近くにある大型ショッピングモールに買い物に来ていた。

「で、これどんな状況？」

一人小声で愚痴る。彼はそのショッピングモールでテロに会いました。どんな天文学確率でそんなことが起きたのか…。

(ま、知ってたんだけどな)

少年は一人心中の中でつぶやく。

「いや、このモール全体が占拠されたんでしょ。見ればわかるじゃん」
少年に話しかけたのは一人の少女。茶色の綺麗なストレートの髪の毛、身長は女子としては少し高いくらいの可愛いと言える女の子だ。

「そしてこの場にはヴァーミリオン皇国第二王女と日本の銘家である黒鉄の娘がいて、^{ブレイザー} 伐刀者が何人もいる建物に金目的で占拠している馬鹿な犯罪者がいると。本当にバカかよ。狙うなら^{ブレイザー} 伐刀者のいる学園から遠い場所にある銀行とかにしろや頭大丈夫かよ」

「そんなこといつてる君も^{ブレイザー} 伐刀者だし私もだし。これ強引に全員捕らえればいいんじゃない？」

「いや、どうせ人質の中にも何人が混じってんだろ。本当に危なくなったら人質とって撤退するくらいの脳は持つてるだろ。持つてなかったら本当にテロする気あるのかっていうくらいの間抜けだ」

「そっか、じゃあその人を見つけるまでが大変だねえ。一般人に被害だすわけにはいかないし」

そんな感じでテロリストに見つからないように細工をして話していると、

『ごんのガキがああああああ!!!』

人質の少年にアイスクリームを投げつけられた一人の兵士が激怒し、自分の腰ほどにも満たない身長の子供の顔に容赦ない蹴りを見舞う。

『あぐっ』

『シンジツ！すいません!!どうか、子供には…!!』

人質の中から飛び出してきたのは二十代後半ほどの女性。見たところ少年の母だろう。

「あっちゃ、やっちゃまったな。これは急がねえと」

「どうするの？最悪全員隔離すればいいんじゃない？」

「いや、その前にステラ姫が我慢ならぬみたいだぜ」

少年のもとに飛び込んだ女性は子供をその身に宿しているのか、お腹が大きくなっている。当然、そのことを気にも留めず少年に対して怒りをぶつける兵士の男とそれから少年をかばう女性。そして、

『ダメだねエー！豚の分際で来たる《新世界》の《名誉市民》である俺様のズボンを汚したんだア！死んで償えやアツ!!』

何のためらいもなく引かれた銃の引き金。

その結果、銃からは瞬く間に鉛の塊が超高速で吐き出され少年とその母親は穿たれ、貫かれ、命が絶たれる——
はずだった。

しかし、現実にはその鉛玉は母親にも到達せず消え去った。

なぜなら、親子と銃の間に割り込んだステラの炎が、煤すら残さず消し飛ばしたからだ。

☆

「伐刀者だと……ッ!？」

「こんのお！」

彼らは反射的にステラに向かって銃の一斉掃射を放った。

しかしそれらは——

「《妃竜の羽衣》」

ステラが身に纏った焰の羽衣の前に存在することも許されなかった。

しかし、それが恐怖でないのは一部の伐刀者や本人であるステラだけで、

「「きゃあああああああああ」」

人質にとつては危険で恐怖する対象でしかない。

激しい音はそれだけで戦闘なんてものと関わり合いの無い一般人の恐怖を引き立てる。そしてその恐怖はパニックを招き、人が移動して銃撃に巻き込まれる可能性もある。そこでステラは、

「落ち着きなさいッッ!!」

「二———二」

つるべ打ちしてまき散らされる轟音さえ押しつぶされる大きさの、『威厳』を持った一声で一般人、まして襲撃者である兵士一同までその場で固まった。

「別にアンタ達と戦闘する気はないわ。だから落ち着いてアタシの話
を聞きなさい」

そう告げたステラによつて観客や兵士の浮足立った雰囲気は落ち着いてきた。

「ほおー。流星皇族つてことかな？兵士まで落ち着かせたね」

「まーいざとなったら俺がなんとかするしここは穩便に行きそうなほうでいきましょうや」

一方冒頭から話していた二人に緊張感や危機感なんてものではなく、全てを落ち着かせたステラの行動に感心を示していた。というか、少年の方は外部に連絡を取っていた。

「これでよし、これで俺たちが固有^{デバ}靈装^{イス}や能力を使つてもお咎め無し。責任は黒乃理事長にとつてもらえる」

「おおー。珍しく許可をとつてるんだね。いつも自由に使つてるくせに」

少女は割と本心で驚く。何にしてもこの男、自由に能力を使いさまざまな場所をまわってきたのである。

「いや、それはどうせ許可なんて取れないから。今は全然使つてオーケーな場面だし。テロなんてそうそう出会えないから鎮圧して何人かからは個人的に情報を吐いてもらおうかなと」

「あいかわらず悪いこと考えるねえ。いいけどさ」

少女は人質にされているなんてことを忘れているかのようにならカラと笑う。全員、今はステラと出てきた首謀者の方に注意が向いて

て気づかない。その時、

「はっ。」

少年は事件の首謀者と紅蓮の少女のやり取りを見てぼかんとする。
「ん？どうした…の……」

少女も聞き返す途中でそれを目にし、驚く。

（ああー！ー！そーいやそんなこともあつたな!!クソツ、事件の印象が強すぎて忘れてた。）

そこでは犯罪者たちの前でストリップするステラの姿があつた。

「ねえ…、今すぐあの屑消していい……う？」

「それはまずいって！あんなやつらでも《解放軍》のやつらなんだから!?情報とかもあるし、捕まえなきゃ!?!」

「うぐっ…消しちゃだめかあ……」

とそんなこんなで慌てていると、

「《障波水蓮》!!」

もう一人の伐刀者の少女の声が響き、水の障壁が生み出された。

☆

（今だ……!）

それを機に、上の階から身を潜めて見ていた一輝は現場に飛び込んだ。

「ちい!!まだ伐刀者が居やがったのか!?!」

バシヨウという名の解放軍の幹部は驚くが。そこで自分に向かつてくる男を見て、

（おちつけ…俺に攻撃は通じねえんだ。人質はいるし大丈夫だ……）

腐つてもテロリストの幹部。その考えに行きつき一輝の剣を防御しようとして左手の攻撃を吸収する指輪、《大法官の指輪》で受け止めようとするが、

「第七秘剣——雷光」

視認できないほどの速度の剣に左手を切り落とされた。そして、返す刃で右手も切り落とされる。

「ぎゃああああああ!!俺のうでがああああ!!!テメエよくも――

ツ」

「ガタガタうるさいな」

「ひ……っ」

一輝の鬼のような形相に黙らされるビショウ。それを気にも留めず一輝は兵士と戦っているだろうアリスに手を貸すためにアリスとステラのもとに向かう。

だが、そこではステラによって無力化された一般兵が倒れていた。あんな辱めを受けていたにもかかわらず、自分のやるべきことをしっかりとやっていたのだ。

「ステラ……」

そして、その功労者をねぎらってあげようと一輝が向かおうとしたとき、

「う、動くなアアアアアアアアアア!!!」

「二」――「三」

アリスや珠雫を含め、事件の解決者が集まろうとしていたとき、大声が上がった。

☆

突然の悲鳴にも聞こえる怒声。それは人質の中から聞こえてきた。

一輝たち四人が一斉に振り向くと、そこには赤いTシャツを着た男が中年女性のこめかみに拳銃をつきつけている光景があった。

「た、たすけてええええ!」

「ガキども動くんじゃねえ!?こいつの頭ぶっ飛ばされてえのか!」

「しまった!人質の中に紛れ込んだのか……!」

そこで一輝たちはテロリストが人質の中に紛れ込んでいたことを知る。そして、両腕を切り離されたバショウが、

「……っひひ、間抜けが。お前らの仲間だけが紛れ込んでたんじゃねえーツブシ!!?!」

話している間に光の矢が芭蕉の肩を貫いていた。

「……は？」

それを発したのは誰だったのか。人質を取ってた男も、

「な、なんへブウツ!?!」

今度は光の球に吹き飛ばされ無力化。その飛んできた方向を見ると、

「ごめんもう限界。こいつら潰す」

「あああ、まあ、人質の中の仲間も引きずり出せたいもういいんだが……」

怒りの形相の少女と一輝たちが良く知っている少年が居た。

☆

結局、少年——将季がとった行動は人質に紛れていた男の距離を他の人質から引き離れただけ。あとは隣の少女の仕業である。

「に、兄さん!?人質の中にいたのか!」

「お前ら、最悪の状況も考えろってか、ありきたりの戦法に嵌ってんじゃねえよバカ。人質を巻き込むなアホ」

「ご、ごめんなさい将季兄様…。あの女の人は……?」

「本人に聞け。俺は人質の中にもうあんな奴がいらないか一応調べるからな」

そう言って将季は人質の前に立ち、十人単位ずつ魔力を使って調べていった。そして、四人が呆けながらも誰なのか聞こうと女の人の方向に向くと、

「アンタ何やってんの?女の子に服脱がせるとか馬鹿じゃないの下端。あんたみたいなのがいるから世間で男はオオカミだとかいろいろ言われんのよ虫けら。ていうかなに?あんた自分がカツコいと思っであんなことやってたわけ?キモチワルいわこれ以上なく。だいたい……」

めちやくちや言ってた。しかもバシヨウに光で作ったらしい針を刺している。チクチクチクチク……。痛そうだ。テロリストに人権なんてあつてないようなものだが。

出番のなかった彼が出る回

ショッピングモールのテロ事件のその後を話そう。

当然、テロを起こした《解放軍^{リベリオン}》の幹部である《使徒》のバシヨウを始め、テロリスト達は遅れてきた警察に逮捕されていった。黒乃から中に破軍学園の伐刀者^{ブレイザー}がいるということは伝わっていたらしく、このところはスムーズに行ったと言っている。

幸いこの事件で怪我人は一人も出ず、一輝が《一刀修羅》をバシヨウに斬りかかるときに使ったのでその反動が来たくらいだった。

その逮捕されたテロリストだが、もうあきらめたらしい一般兵たちの証言と警察が確保した実行犯は数が合わず、何人かは先に逃げ出していたものだと言論付けられた。

そうして、実質被害なし、学生騎士が解決したということでの事件は幕を下ろしたのだった。

☆

その事件の翌日、破軍学園近くのアパートの中。そこは現在、イグアナ・ライトベルという人物が借りている。そこには将季、一輝、珠雫、ステラ、アリス、そしてイグアナがいた。

「それで、兄さんはイグナさんと付き合ってる。って、ことでいいんだね?」

将季に尋ねたのは一輝。やはりこの男、肝が据わっている。

「いんや、こいつが勝手に言ってるだけだよ。俺の旅の同行者だ」
将季はあきれた声で一輝に返す。

そう、別に将季はイグナと付き合っているわけではない。

「こいつは俺が二年前くらいに会ってから一緒に世界中を回ってたんだよ。もともとはアメリカの方だったっけ?その辺で本物の銃を買いたいなと思ってなあ」

「「出会った理由怖い……」」

やはりこの戦闘凶、まともではないらしい。

「いや、それくらい普通だろ？俺の固有^{デバイス}霊装は銃なんだし、その扱いに慣れるって意味でも銃は扱ってみたかったしな。俺の部屋の中にあるけど今持つてくるか？」

「いや、いいです」

将季にしては案外まともな理由であった。しかし、この部屋で話し始めてからまだ一輝以外まともに話せていないのはなぜなのだろうか。

「で、まあ買いに行った。その店で会ったのがその時銃の店の店主してたこいつでなあ…。ま、その時いろいろあって、一緒に旅するようになったとき。おしまい」

詳しく語るとかなりの長さになるのでそれは後日のことにしよう。

「でも、イグアナさんは将季兄様に好きって言っているんじゃないですか？返事はしないんですか？」

珠雫のもつともな意見が出される。確かにその通りなのだが…。

「いや、俺自分がまともじゃないって知ってるし、こんな人間と付き合うなんてことになったら人生本当に損するだろう？そんな不幸な人間を生み出したくないだけさ」

将季は窓の外を眺めながら遠い目をして話す。他の四人（イングナ以外）はまともじゃないって自覚会ったんだ…なんて思っているが。「そんなこんなではぐらかされている可哀想なイグアナちゃんでした。シクシク…」

イグアナがそんな泣き真似をしているが、ほかの人からしたら「あ、この人もいい性格してるな…」で終わりだった。そんな中、今まで空気がだったアリスが聞く。

「じゃあ将季さんは中学生の年になってからずっと外国を旅して周っていたの？」

「ああ、家を出たつう一輝にたまに金を少し送ってやったり、家にたまに連絡くらいは入れてたけどな。基本、小学生の時に中学までのカリキュラムは終わらせて、高校の勉強も中堅大学合格レベルまではやったからな。中学、高校は通わなくても許してもらったし」

「なんていうか、イツキとは違った大変な人生ねそれ」

「いや、楽しかったぜ？なんつっても移動は高い建造物が無い場所を選んで地上10メートルくらいのところを距離短縮して歩けばそれで目的地到着だからな。いろんなところを旅して周ったもんよ。万里の長城とか、ナイアガラの滝とか、グレートバリアリーフとか…。世界には美しい場所、幻想的な空間、広大な景色なんてものがたくさんあった。それらを見て回りながら強い奴と戦えたらさらにハッピーって感じだったなあ。」

「へえ、聞いてたら行きたくなくなってきましたね。お兄様、珠雫とハネムーンで世界旅行にでも行きませんか…？」

「珠雫！僕たち結婚できないからね!?兄妹だからね!?珠雫と一緒に行ってみたいし興味はあるけど…」

「お兄様!?一緒に行きたいと!?わかりました!!今から黒鉄本家に戻って毎年無駄にたまっていくだけだったお年玉を引き出して二人で世界へ……」

「珠雫うー。おー。戻ってきてくれ珠雫。」

一輝が話しかけるが珠雫はトリップしたまま数分帰ってこなかった。

「ま、そんな俺の話はいいんだが。自然とこの濃い面子に加わってるそこの男は何なんだ？」

「あら、わたしは乙女なのだけれど？」

「うん、見た感じオカマかな？」

「違うわ。…あたしは、男の身体に生まれた乙女なの」

「そうか、よろしく。一輝と珠雫の兄の将季だ。」

案外将季はすんなりとアリスの存在を受け入れたようだ。

「た、対応早いわね。アタシたちも戸惑ったんだけど…」

「いや、世界には俺も踵を返して逃げなきやいけないような奴らがいてなあ。アリスはいいやつさ。これがムキムキの髪型がツイインタールのアゴヒゲ生えてるおっさんとか、ごりマッチョの髪剃った女が俺って名乗るのとか…世界は危険でも満ちてるんだぜ……」

何て言うか、滅茶苦茶悟ったような将季の雰囲気は普通の一年生二

人（トリップしているのとオカマのぞき）は同情を禁じ得なかった。

☆

イングナの住んでいるアパートからの帰り道、

「そういえばそろそろ七星剣舞祭の学内予選が始まるんじゃないかねーか？」

唐突に将季が言った言葉に、

「ああー!!」

完全に忘れていたらしい一輝とステラは大声をあげた。

「お前ら…それで大丈夫なのかよ？実戦だぞ？」

と将季があきれた声をだしたとき、

「おんやあ、そこにいるのは黒鉄君じゃないか？」

一人の男が一輝に声をかけた。

「ひさしぶりだね、桐原君」

その男は桐原静矢。前年度の『主席入学者』にして——
去年の七星剣舞祭代表の一人。

「ああ。久しぶりだね黒鉄一輝君。君、まだ学校にいたんだ」

告げるのは蔑みの一言、細めた目からは嘲りの視線を寄越した。それにステラと珠雫の二人の表情が目に見えて不快なものに変わる。

「桐原くくん、誰それ〜？」

「桐原様あく。行きましようよ〜」

着飾った女の子に囲まれ持て囃される桐原は、

「ちよつとだけ話があるんだ。待っててくれ」

困っている数人の少女にそう言う和一輝に対して向き直り、

「黒鉄くん。……君はまだそんな惨めな能力で騎士なんてものを目指しているのかい？そもそも、君なんか騎士になれると思っっているのかい？」

言い放った。その言葉は、今度こそ彼を想う少女の気にふれた。

「アンタ……いい加減にしなさいよッ！」

「ステラ、いいから」

「良くないわよ！こんなに好き放題言われて！大体アンタなんかよりイツキの方がずっと強いわよ！アンタなんて、イツキの足元にも及ぶもんですか!!」

そのステラの言葉を受けた桐原は、

「……ハハハハハ！これは傑作だ。どうやら君は自身の本当の力をカッコよく吹き込んでいるんだね。ちゃんと、——かつてボクとの戦いから怖くて逃げだした臆病者だと伝えなきゃダメじゃないかア」
「え……っ」

ステラはその言葉に衝撃を受け一輝の方に振り返るが、一輝はそれを否定しなかった。

「う、嘘よ！そんなことあるはずないじゃない！イツキは私に勝った、ただ一人の騎士なんだから!!」

「そうか。ならヴァーミリオン君、賭けをしないか？」

「……賭け、ですって？」

「君の言葉が本当か間違いか。それを知る機会はずぐそこに整ってるんだ。黒鉄君、君が僕に何も言わないのは生徒手帳、確認してないんだろう？見てごらんよ」

その言葉に一輝が電子生徒手帳の電源を入れ、メールの受信を確認。そのメールの内容は、

『黒鉄一輝様の選抜戦第一試合の相手は、二年三組・桐原静矢様に決定しました』

「——ッ！」

「そう、君の選抜戦初戦の相手はこの僕さ。だからその場で——僕が負ければ僕は今日の侮蔑を取り消し、謝罪しよう。だけど僕が勝ったら……僕のガールフレンドの一人になってよ」

「桐原君ッ！馬鹿なことは——」

一輝はその馬鹿な提案に当然、声を荒げるが、

「いいわ、その賭け受けるわよ」

「ステラ!？」

ステラはその提案を受けた。それを受け桐原が笑みを漏らす。

「ふふふ、話はこれで決まりのよ」待てや、はあ……「何かな？君は誰だ

い？」

口をはさんだのは将季。あきれながらその場を見まわし言う。
「第一にステラ姫、あんた一国の皇女様だろうが。そんなほいほい
ガールフレンドになるとか賭けるな。そして、その細目。お前も国
に殺されるぞ」

その言葉に頭に血が上っていたステラはハツとし、桐原は機嫌を悪
くした。

「そんなことあるか、本人の承諾を得ているんだぞ？大体、さつきから
誰かって聞いているだろう？」

「第二にクソガキ。テメエ誰に向かってタメ口で言葉を言ってるんだ
？」

そう言い、将季は一步で桐原の真横まで移動し、固有靈装^{デバイス}である銃、
《花火》を桐原の懐に突きつける。しかも、周りからは見えない角度調
整付きだ。そのことに気付いた桐原はヒツ、と声を漏らし、

「そ、その拳銃のデバイス……。く、黒鉄将季……!!？」

「おう。その将季さんだが、誰に向かって？」

将季はニツコリ笑って桐原に再度、問いかける。

「ス、スイマセンでした！もうこんなことは無いようにします!!」

そういい、女の子たちのところまで駆けていった。その速さはまさ
に、《狩人》と呼ぶに相応しい速さだった。

エキシビジョンマッチ（試合前）

桐原の急襲（？）から二日後、一輝たちはたった六つの『七星剣舞祭出場枠』を巡る『選抜戦』が始まる前日。この日は全校生徒が入ることが出来る第一訓練場に生徒全員が集まっていた。

「一体何なんだろうね、開会式があるなんて聞いてないし。連絡なら先生から各クラスに伝えればいいし」

「さあ？ 考えても意味はないんじゃない？ アタシたちの試合はまだ明日からだから気合い入れるためってのは一応アリだと思うけど」

一輝とステラは一年一組の集団の中で何が起こるのか話していた。「あれあれ？ お二人は何があるのか知らないんですか？」

そこに声をかけたのは加々美。二人のことを意外そうに見ていた。「あれ？ 加々美さんは今日何がのかわ知ってるの？」

「はい。っていうか、本当に先輩は知らないんですね」
心底意外そうに一輝のことは見ている加々美。

「なによ、知ってるなら教えなさいよカガミ」
「それはですね——」

加々美がステラの疑問に答えようとしたその時、
『ええー。それではあ、選抜戦前日の特別イベントを開催したいと思えます!!』

マイクの音が響き渡りガヤガヤとうるさかった場内が静まり返った。
「あやや……、まあ、今からそれが始まりますよ」

加々美が下がっていったあと理事長である黒乃がマイクを握る。

『ええー。それでは、今日は事前に生徒手帳にあったように校内選抜戦の前の特別イベントを開催する。両選手、リングの上に』

黒乃の言葉と共に出てきた人物は、

「あれってショーキじゃない！」

片方からは一昨年の《七星剣王》、黒鉄将季。

「あの人は……!!」

もう片方からは着物を着て下駄を履いた小柄な女性。一輝は、い

や、破軍学園の生徒はその人物が誰か知っていた。

『では、今から《デイスタンサー虚離奏者》、黒鉄将季と、臨時講師である《夜叉姫》、さいきょうね西京寧々の模擬戦を始める。』

西京寧々。『KOK』トップリーグの選手。しかもワールドランキング三位の人物である。

なぜこれほどの人物が破軍学園の臨時講師などをしてているかという、今年新理事長になった神宮司黒乃により、旧理事長派であった先生がまとめて大量リストラされたので、先生の数が全体的に足りていないのだ。そこで、黒乃がKOK選手時代に同年代だった彼女をその縁で非常勤でいいからと講師を手伝ってもらっているのだ。

『固有デバイス霊装は《幻想形態》で、相手を気絶させた方が勝ちだ。生徒諸君。これはエキシビジョンマッチだ。このレベルの戦いがトップレベルになると繰り広げられるということをしつかり見ておけ』

黒乃はそれだけ言うとは放送席から姿を消した。

☆

「いやあ、うれしいですね。《夜叉姫》と戦えるなんて思ってもいませんでした」

「そーかい、しよーじきこっちは結構ダルいんだけどねー」

リングの中で相對する二人、将季の方は戦意上々。對する寧々の方は少しイヤそうに表情を苦くさせている。

「しよーじきくん、君強いんだよねー。それこそ本当に本気を出さないといけないくらい。そしたら訓練場壊しちゃうと思うんだけどなあ。くーちゃんに叱られたくないんだけどねー」

「いやあ、大丈夫ですよ。……たぶん」

「まあ幻想形態だしそこまでひどくはならないかーね」

「いや。今回はさすがに俺の能力で周囲の安全は確保しますよ」

将季は固有デバイス霊装である『桜花』と『花火』を手に出現させ、鉄扇を持つ寧々に相對する。

『さあついにこの時がやってきました！選抜戦前日ということで組ま

れたこのエキシビジョンマッチ！本日、この試合の実況は私、放送部の月夜見が、解説は折木有理先生が担当します。さあそれでは本日の対戦するお二方を紹介しましょう！！一人は、一昨年 of 七星剣舞祭優勝者！！その圧倒的過ぎる戦いで去年は七星剣舞祭に参加できなかった生徒！この破軍学園が誇るBランク騎士！そして英雄の血を引く男！黒鉄将季選手！！』

解説の言葉に会場が湧き、一応将季も手を挙げて答える。

『もう一人は日本人なら、いや、世界中が知っている！KOKトップリーグの世界ランキング第三位！その能力の全力は禁技指定を受けるほどの騎士！その風貌からついた二つ名は《夜叉姫》！今年から破軍学園の講師も務めていらつしやる西京寧々先生です！！』

その言葉に会場が将季の時以上に盛り上がる。ただ将季と違い答えはしないが。

「じゃあ、そろそろ……」

「あいあい、はじめますかーねー」

将季はその顔を戦意に染め、寧々は少し真面目な顔になり、『それでは！エキシビジョンマッチ開始です！！』

戦闘が始まった。

☆

『おっと、両者動かない！これは双方様子見か？』

大半の観客の予想とは反対に試合は静かに開始した。試合開始の合図があつたものの、将季は目を閉じ集中し、寧々は何もしていない。両者ともにやる気がないのかと観客が疑い始める。

『両者、一向に動く気配がありません！！これは一体……！！』

実況の声の半ばそれは起こった。

『あつと!?カメラからの映像でリングが遠くに見えるぞ!?これは!?!』

『黒鉄選手の能力ですね。彼の能力は距離を操るものですから、それでリングと観客席の距離を離れたんだと思います』

解説の折木先生の語りに彼の能力を知らない生徒は驚嘆する。

『しかし私たちがが実際に見ている両選手の姿は大きさが変わっていませんが、これは一体どういうことでしょうか?』

『これが黒鉄選手が長い間集中していた理由ですかね』

『折木先生、それは……』

『この能力は大きく二つの観点に分けられると彼は学校や国際機関に報告しています。一つ目が単純にA地点からB地点までに存在する『実在距離』。二つ目がA地点からB地点までに私たちが感じている、認識している『認識距離』。普段能力を使うときは彼は一つ目と二つ目を無意識に変更しているらしいのですが、ある程度集中して魔力演算をするとこのどちらかを操作することも可能なんだそうです。今回は『実在距離』を引き延ばして『認識距離』をそのままという変更を行ったようです。カメラは無機物ですから関係ないんでしようね。これで観客や訓練場に被害が出ることはほぼないと言っていいいでしょう。』

『それでは、両選手は私たちへの被害を抑えるために今まで……!?』
『そういうことになりますね。さあ、状況が動くと思えますよ』

折木の言葉を発端としたかのように、両選手の姿がその場から消えた――。

エキシビジョンマッチ（試合）

先に動いたのは将季だった。バックステップで寧々から距離をとる。攻撃に出たのではなくむしろ退避だったが、先に動いたのは紛れもなく将季であった。

パースペクティブ・ワールド
「遠近世界」

彼が呟くと試合で戦っている二人の周囲の空間が歪み、綺麗には見えなくなつた。それは会場の観客からだけではなく、相對している二人にも言えることだ。

将季のこの伐刀絶技ノーフルアーツは、周囲の空間の距離を捻じ曲げ知覚、視覚共に混乱を与えるものである。言葉にするとそれだけなのだが実際に相手にするととても厄介な能力である。なんせ数メートル移動する度に距離感覚が変わっていくのだ。実際に100メートル離れると知覚し、全力で将季に向かうとすぐ近くまでたどり着いているということまで有るのである。つまり、この結界の中で自由に動けるのは作者である将季位なのである。

ちなみにこの能力、一輝のような相手にはかなり相性が悪い。実際に距離を変えていても、攻撃するにはある程度の距離の範囲内に居なくてはいけないので、完全に自身の身体を把握できている一輝が全力で将季に突っ込めばその時点で結界の意味がないのである。いきなり至近距离になつたとしても、彼なら無理矢理にでも体勢を整え、いや、崩れないまま将季と斬り合えるだろう。

だが、一輝までとはいかなくても寧々もただ者ではない。世界ランキング第三位というのは能力ありきでたどり着ける所でもないのだ。「大変だーねえー」

素晴らしいながら彼女の周囲の地面が陥没し始める。彼女の能力である重力操作により地面（ステージ？）が耐えられず、崩壊し始めたらしい。

将季はそれを見ると自分の靈装デバイスである花火はるかを寧々に向けて撃ちまくる。将季の銃は見た目シングルアクションで連射できないように見えるが、それは見た目だけだ。靈装デバイスは自分の精神の結晶体とも言わ

れることがある。つまり、将季は心の中で『うお〜!!なにあれかけー!!』と思っっているということである。実際に口にするかどうかは別だが。

そして同時に、彼は銃の連射にもあこがれを抱いているのである。具体的には前世のS A O（隠れてない気がするが）のベヒーモスさんのミニガン連射とか緋弾のアオーアのネタである黒雪さんの武装のM 60機関銃の連射とか大好きなのである。言葉にすると、『銃の乱射とかヤバくね？二丁拳銃もロマンだけど』である。そんな永遠の中心病である男の心を具現化したものが「桜花火」である。

つまり何が言いたいかというと彼はとにかく乱射した。それはもうモブがよくやる一斉掃射もかくやのごとしである。しかし、それらは全て彼女の周りに展開されている重力によって地面に落ちる。それに構わず彼は撃ち続けるが、彼女がいつまでもそこでとどまっているはずもなく、両手の鉄扇に重力が集まり黒刀をなす。

「そろそろおもちゃ遊びはいいかい？シヨーキ君？」

寧々が一步踏み出すとその進んだ分だけ地面が陥没していく。

さらに、彼女の両手にある黒い剣に風が逆巻き集まっていく。

『黒刀・八咫鳥』

それが彼女の両手にある黒刀に付けられた名前。重力を収束させ、刀身として扱う。つまりその斬撃を身に受ければ《重力》、要するに純粋な“力”の集合体の、収束した一撃を喰らうということだ。つまり、

「それを貰うと流石の戦闘凶もまずいかなあ」

喰らってはいけない攻撃だということだ。

そう言いながら彼は凶悪な笑みを顔に見せる。もとより彼女の實力など疑っていない。“世界”の名を背負っているのだ、一筋縄ではいかないこともよくわかる。手元に彼のもう片方の相棒である「桜花」を出すと自分から重力の檻に向かっていく。もとより逃げの一手など彼女に対して失礼だろう。自身の全身全霊を賭して初めて勝てるのがこの次元の相手だ。もちろん、自分がその域にいるのも十分に分かってる。しかし、ここで枷を解くのは後々面倒なことになるの

は分かっているのですそんなことはしない。

彼は「桜花」を構え走る。走ると言っても彼は距離を操ることが出来るので一瞬で寧々の五メートル内に出る。そこには重力の檻がその牙を剥いているのだが彼には影響が無いように見える。

「それは凶悪だねえ…!!」

寧々は苦笑いしながら黒刀を振るう。

「あんたの能力もだけどなあ!!」

将季もそれに応じて刀を振るう。その刀には、黒いモノが纏わりついていた。

☆

「あれは…?」

ステラが将季の剣を見て疑問に思う。

「ああ、ステラは兄さんがまともにも能力を使うのを見たのは初めてだったね」

一輝は試合を真剣に見ながら将季の能力について話す。

「あれは兄さんの魔力じゃなくて寧々先生の魔力を自分の刀に纏わりつかせているのさ。兄さんが初めに銃を乱射してたのにはちゃんと意味があつてね。僕も完全に理解している訳じゃないんだけど、あの銃で撃たれた弾丸には兄さんの魔力がついているんだ。その魔力を操作して距離を何とかして銃に集めることが出来るらしい。その時に相手の魔力を一緒に持つてくると相手の制御を離れた、兄さん曰く“色付き魔力”を集められるそうさ。もつとも、他の事と並行して演算することなんて出来ないって兄さんは言ってたけど、そんなことが出来る時点で規格外だよ」

一輝はどこか嬉しそうにしながら語る。

「でも、他人の魔力なんて操ることが出来るんですか?」

それに疑問をはさんだのは加々美だ。彼女の疑問はもつともである。そんなことが出来るなら他の騎士たちも同様の手口で他人の魔力を操れる可能性もあるだろう。しかし、少なくとも自分は聞いたこ

とが無いと加々美は問う。

「他の人が出来ないのにはもちろん理由がある。まず、魔力つて人の制御を離れた瞬間から薄くなつていくんだ。これを兄さんは距離の操作により少ない薄化で防いでいる。そしてもちろんだけどこれ、物凄い演算量が必須なんだよ」

当然である。他人の魔力を操れるならどれだけ大きな力を生み出すことが出来たのか。その組み合わせは考え出すときりがないのでここでは割愛する。それでも、国際機関などがそれをしないのは魔力演算が事実上不可能であるからである。

これはとある研究所の発表なのだが、能力の遡上効果を發揮させようとして風使いと炎使いが手をつなぎ、互いの能力を制御しようとした実験があつたらしい。その実験は結局のところ、風と炎が暴走して散つていったのが結果だつた。その二人の被験者は、演算量が大きすぎて制御を手放したと報告。観測の結果にも同様のことが表示され、その実験はお蔵入りになつたのである。

「兄さんは僕に小さいころから付き合つてくれていてね、一緒に特訓してくれたりしたんだ。一緒にそんなこと出来た時間も少なかったんだけどね。兄さんは自分が出来る限界に挑戦して、結果刀に纏わりつかせたり、銃弾に付与することくらいはできるよになつたんだ」
一輝が語り終えるとステラは、ふうんと感心の声を漏らし、試合観戦に戻つた。

☆

二人の打ち合いは相当に目がいい人にしか見えなかつただろう。普通に武術などに通じてない生徒から見たら、黒い旋風が二人の周りで起きているようにしか見えない。

しかし、目がいい一部の人間はどれだけ高度なやり取りをしているかはつきり分かる。寧々が片方の黒刀を振り下すと将季はそれを受け流し寧々の態勢を崩そうとする。当然そんなに簡単に体制を崩すはずもなく一瞬距離が空く。次の瞬間その地面には黒い銃弾が穴を

穿っていた。その数秒後には寧々が二刀を交差させながら斬りかかり、それを将季は銃に両手を添えて止める。発砲するが当たらず、上にいる寧々の斬撃を受け止める。これらは全て重力範囲内で行われているが、将季は盗った重力をぶつけ相殺させている。でなければ一瞬で斬り伏せられていただろう。

二人はいったん距離をとる。

「技も上々、本当に高校生なのかねシヨーキ君？」

「そうともさ、真正正銘、純粹培養の高校生っすよ？中学は通ってませんが」

「あー、そうだったねえ。世界を回ってたってバトルジャンキー何してるんだい？」

「楽しい旅行を」

そんな一見和やかな会話をしている二人だが、その周りの魔力は半端じゃない量である。それはステラほどではないにしろ周りの景色を歪めた。

二人とも互いの力量では接近戦ではすぐに・は決着がつかないと思っただのだ。次は遠距離戦である。

将季は能力的に遠距離は得意としないのだが、やるしかないだろう。

二人は魔力を高め、そして、

「黒刀・八咫鳥——!!」

コンフリクト・ブレイク
「矛盾破壊——!!」

全力をぶつけ合った。

試合が終わって

模擬戦が終わり生徒たちが教室や寮に帰っていく中ステラは一人考えていた。

——自分に果たしてあのような戦闘が出来るのか

答えは否である。ステラも自分がこれまで才能に胡坐を掻かず必死に努力してきた自信があった。けれどもあの二人の実力の次元に足を踏み入れているかと言われれば首をかしげるといふ結果になる。

——それでは自分はあの二人に才能で負けているか

答えは再度否である。自分の能力は確かに炎を扱うというメジャーな物だがそれでも他の炎使いより強力な炎を扱える。確かにそれで昔大変苦労したが、制御できるようになった今では強力な力である。そして、世界一の魔力保有量。これはあの二人に絶対に負けていない物である。世界一と国際機関が認めたのだ。その評価が間違っているとは思えない。

——それでは何が自分にとって必要なのか、足りていないのか

努力、だろうか。日本に来てから少し、本当にこの国に強者が多くいると感じる。これは祖国に引きこもっていたら味わうことが出来なかっただろう感覚だ。そこは素直に自分より上の存在に嬉しく思い、認める。その上で自分がどうしたら彼らに追いつけるか——

「ステラ!!」

「ひゃい!!??」

ステラは自分に叫びかける声で我に返る。声の方向を見るとふと間近に一輝の顔が見えた。それを認識するとステラの顔は一気に熱を持ち、

「つきや!?!??」

一輝からすごい勢いで離れる。

「だ、大丈夫かい?ステラ?」

「ただだいいじぶよもんだいないわ」

「いや、さつきまでぼーっとしてたみたいだし今度は凄い勢いで話し

てるしね」

「ひゃっ!?——すーはー。よし、大丈夫よイツキ、心配ないわ」

ちなにみこのやり取りは隣でぼつちり加々美に聞かれており、彼女はげんなりしながら一人で寮に戻っていった。

(まだこの二人って付き合っていないんですかね? うーん、でもステラ姫なんてものすごくわかりやすく態度に出してると思うんですけど。センパイはなんにも分かってないようですよ、はっ、これがよくある鈍感系主人公ってやつですか!?)

こんなことを考えながら帰っていったとか。

ちなみに弁明ではないが、一輝は別に鈍感というわけではなく鋭すぎる感覚が全てバトルに使われているというだけである。それこそ、告白されれば難聴を起すようなよくいる無自覚ハーレム作成主人公とは全く違うのである。

「で、どうしたんだい? 上の空だったみたいだけど?」

「さっきの二人の戦いを思いだしてただけよ。すごかったし、もつと頑張らなきゃと思ったもの」

ステラの言葉にああ、と頷きながら一輝は自分の自慢の兄の姿を思い出す。

☆

衝撃が観客席まで届く。当然、その中心となったフィールドがどうなっているのかを即把握している人物はいない。砂煙に覆われているその場所を見てあと何十秒かしないと結果が分からないかと思つた生徒は多くいたが、当然この世界のトップレベルでそんな都合主義が待っている訳もない。2. 3秒後には寧々が強めた重力によつて砂煙は完全に落ち、きれいにフィールドの様子が見えるようになった。

そこには――

「容赦ないねえ、こんないい女に」

「そんな余裕が無かっただけっすよ」

――血を腕から流し少しの負傷を負った寧々と、一歩手前まで斬撃痕がありながらも苦笑している将季の姿があった。

将季の放った《矛盾破壊》コンフリクト・ブレイクは距離を離してから急に元の距離に戻したり、逆に距離を縮めてから急に解放し元に戻すと発生する力による衝撃――という風に国際機関に報告している攻撃である。それは実際、防御不可能ということである。防御とは基本的にガード、つまり来る攻撃を受け止めることである。だが衝撃そのものであるこの力を抑え込むことなどできないし、一番いい退避方はそこから離れることである。実際、寧々がその場から飛びのいていなかったらもつと重症だっただろう。

対する寧々の《黒刀・八咫鳥》は超強力なエネルギーの塊による斬撃とはいえ、「斬撃」である。つまりこれを避ける方法は多々ある。一つは今回の寧々と同じように避けること、これが一番楽である。将季はこれの派生形ではあるが、自身の能力で攻撃が届かないというシチュエーションを作ったというわけだ。最終的に、今回の遠距離対決は将季に軍配が上がった。

「さて、どうします寧々センセ？」

将季が尋ねると寧々は苦笑いしながら手を挙げて、

「審判、あたし降りるよー」

降参を宣言した。

☆

この寧々の判断は正しかったのだろう。

接近戦では互角。いや、当人たちしか気づいてなかったがあれは将季が押していた。寧々の本領は地面での足さばきによる翻弄、今回は相手に自身の近くで能力が聞いていないという今までになかったシチュエーションへの戸惑いもあり、本領を発揮できていなかった。それが負けた原因とは言わない。それは将季が上手かっただけであり敗者が言い訳する所ではないからである。

さらに遠距離戦での負傷。この後も試合を続けていけば傷を負っていた寧々が不利であったのは自明の理である。もつとも、二人とも全力で能力を使っていれば試合の結果は変わっただろう。それがいい方向か悪い方向かは分からないが少なくとも今回と同じ結末になることは無いだろう。

ともかく、観客の期待通りかは分からないがこうしてエキシビジョンマッチは終了した。両者ともに大きなけがもなくカプセルを使うようなことにもならなかった。

「まあ寧々先生は皆知ってるし、兄さんもなかなか有名人だしね。初めてなんだよ、出場禁止なんて措置をもらったのは」

一輝の言う通り、今まで試合を中断したことはあったものの試合自体に出場できない選手なんて七星剣舞祭が始まってから一人も出たことは無かった。文字通り「規格外」な学生が黒鉄将季という人物なのだ。ステラはそれを理解し、同時に戦いたくもなかった。当然だろう。ステラは自分が更なる高みに上るためにこの日本という国に来たのだ。強い人物と戦ってこそという物だろう。隣にいる一輝も強い。それは努力をした結果の物だ。しかし同時に、将季も自分より高みにいるのである。この国に来て早々、こんなにも周りに強者がいる環境に身を置いて、ステラは運命という物に感謝するのだった。

☆

将季は家に戻るとベッドの上に寝転がった。そして、自分の中の魔力の流れを確認する。すると、自分の予想通りに魔力の流れが乱れている。寧々とのバトルで少々テンションが上がりすぎてしまったのかもしれない。そう考え苦笑しながら目を閉じ集中する。

魔力の流れを整える

自分の中にどこまでも潜り込む

集中 集中 集中 集中

その数秒後、世界が一変した。

数分後、将季は何もなかったかのように着替え、くつろいでいた。

「ハア〜イ、将季元気してる〜?」

ドアを開け部屋に入ってきたのはイングナ。白い半袖のYシャツに黒のスカートをはいている。どこのオセロなんだという色の組み合わせだが、さすが、綺麗な人が着るとどんな服でも似合うとはよく言ったものであると理解できる。なお、部屋に勝手に入れたのはスペアキーを渡していたからであり、決して将季がカギを閉め忘れていたとか不法侵入したという話ではない。

「ん、イングナか、今日はどした?」

「いやね、顔を見に来たってのもあるんだけど、今日はこの子の付き添いよ」

そう言っつて、イングナがヘアのドアから中に入ると一人の少女が部屋に入ってくる。

「お兄ちゃん!!久しぶり!!!」

そう声を上げたのは綺麗な金髪の少女、目が碧眼で小学校高学年から中学校低学年のあたりのすがたに見える。服装はピンクのキャミソールに青色のスカート、上にカーディガンを着ている。見た目、短髪で活発そうな少女だ。

「おお、エレナか。元気してたか？」

少女の名はエレナ・ライトベル。年齢は12歳。イングナの妹であり、将季調べでランクD相当の伐刀者^{ブレイザー}である。将季調べや相当というのは、エレナやイングナは国際機関に登録されている伐刀者^{ブレイザー}ではないのである。そのため、普段は一般人として生活している。もつとも、姉の方は実家の黒鉄家に手を回してもらい、能力を使ってもいいようにはしてるので、テロリストの時のような事態になっても大丈夫なのである。このようなときだけ、権力を持つ家に生まれてよかったなあとしみじみ思う。

「うん！お兄ちゃんのおかげで元気だよ!!」

エレナは満面の笑みで将季に答えると、部屋の中に特攻してきて飛びついてきた。将季は武術も修めているので、問題なく受け止めて頭を撫でてやる。そうすると、んんん、と猫のような鳴き声を上げながら頭を将季の胸に擦り付ける。それはまるでマーキングしている猫のようだ。

イングナはそれを部屋に上がって、苦虫を噛み潰したような笑顔を浮かべながら微笑ましく見守っていたが、本題を将季に伝える。

「それで、診てもらえる？」

「おーけおーけ。ちよつとごめんな、エレナ」

将季は一応エレナに断ってから胸に手を当てる。流石に小学生相手にセクハラするような男ではない。そのまま数十秒たつと将季は告げる。

「……うん、もう何一つ問題ないな。ばつちり健康だ」

「そっか、良かったあ……」

イングナはホッと息をついた。

いつまでも玄関で話しているわけにもいかないので二人は居間にかかる。と言っても玄関と居間、台所、そして寝室があるくらいの部屋なのだが。とりあえず、将季は二人にお茶を出し自分も座る。すると、エレナが自分の膝の上に座ってきたので微笑ましい気持ちになりながら頭をなでてやる。そんなのほほんとした雰囲気だったので、イングナが将季をにらんでることには気付かなかったが。二人は少し

世間話をしてから過去のことを思い出す。

「そういえばもう二年たつのよねえ」

「ん？なにがだ？」

「将季と出会って、いろんなことを経験してからよ」

イングナは笑顔で将季に向かって言う。将季はそんなに大したことをしたとは思ってないが、この姉妹にとってはとても重要なことかと思いつき同意する。ただし、そのさい頭を掻きながらだったが。

「そうだな、初めは銃を買いに行くだけだったのにな」

そんな話をしながら将季の一日は暮れていくのだった。

一輝 VS 不遇なあの人

さて、これは将季と寧々とのエキシビジョンマッチが終わってから数日後の話である。

当然のように始まる選抜戦、自身の能力に自信のある生徒たちがその力を競い合っている。将季と寧々は近接戦、遠距離戦と両方ハイレベルな争いをしてきたがこれは学生同士での戦い、あのレベルの戦いがそう簡単に始まるはずもない。実際に一年生の実力者に絞って戦闘の様子を見てみよう。

①ステラ・ヴァーミリオンの場合

ステラは会場に入ると自分に大きな注目が集まるのを感じた。その中に自分を侮っている物が多く存在することも分かっている。実際、

『いけえ、桃谷!!お前が生意気な一年生に現実を見せてやれえ!!』

『桃谷…そいつはAランクなんていうがあワーストワンの落第騎士にも負けてるんだぞ!!勝てる勝てる!!』

と言ったようなやじが辺り一面から飛んできてる。

まあ、自分が一輝に負けたことを否定する気はない。あれは自分も一輝も全力を出して出た結果である。その結末に騎士として、背を向けるようなことは決してできない。そして、外国のお姫様だという点でこの学園の生徒は自分より強いと認めたくないのだろう。日本は第二次世界大戦時から勝者だった。それは黒鉄龍馬の活躍や数人の有名な、それこそあの南郷寅次郎のような騎士の活躍によるものである。そんな常勝の国に生まれ自分も特別であると、外国人には負けなという偏見が働いているのだろう。それはしようがないことでもある。ステラも一輝と勝負するまで自分の努力は誰にも負けていないと思いつ込んでいた。人間の視界というものは誰かに補ってもらえない限りなかなか広がらない物なのだから。

その点、今日の相手は自分の実力をよくわきまえている。いや、自分が魔力などのプレッシャーを与えているのが主な原因かもしれないが。

「アンタは後ろの連中と違ってわきまえているようね」

ステラが話しかけると甲冑姿の三年、桃谷武士はピクリと一回身震いしステラに改めて向き合う。その結果、

(こんな化け物にどうやって勝てばいいんだよ……!!)

桃谷は動けない。理由は単純明快、自分が焼き尽くされる未来しか見えないからである。今十分な距離をとっていても甲冑を焦がし、中に熱を伝えてくるほどの炎。まだ具現させてもいないのにそこまでプレッシャーを受け桃谷は怯む。

「これは実戦よ、試合が開始されて突っ込んでくるんなら丸焼きにされることを覚悟するのね」

そのステラの言葉に、

「……………参った」

桃谷は降参した。

ステラ・ヴァーミリオン：勝因・相手の降参

②黒鉄珠雫の場合

——試合が始まる。

「悪いな超^{スーパー}新星！俺の能力はお前のような『水』の天敵の『雷』だ！相手が俺で残念だったな！——《白雷刃》!!」

先手を取ったのは珠雫の相手、菅茂信三年生。自分の『雷』の能力の刃を飛ばす。それを見て珠雫は、

「《障波水連》」

水で壁を使って防御の姿勢をとる。それを見た菅はニヤリと笑う。水は電気をよく通す。よって自分の攻撃は相手に届き試合終了だ、と

——思っていた。

「なに!？」

菅の驚きはただ単純に自身の必殺だと思っていた攻撃が防がれたから出たものである。そして、その反応からも分かる通り、珠雫の水は雷を完全にシャットアウトしていた。

「なんで!？」

菅は意味が分からずもう一度叫びながら斬撃を飛ばすが、それも先ほど同様に水に阻まれる。

「分からないんですか?！」

珠雫はその様子を見て少しあきれたように言う。

「水という物は元々絶縁体なんですよ。それに不純物が混ざるから電気が通る。それを取り除いてあげただけです」

菅はそれを聞いて驚愕する。いや、なまじ実力があつたため分かってしまう。

「ま、まさか、そんな魔力制御をしているって言うのか!?そんなもの砂漠の中から砂金を探し出すようなものだぞ!？」

菅が驚愕していることに興味もなさそうに珠雫は告げる。

「そういうことですので、ごきげんよう」

次の瞬間、菅の目の前には水の玉が。

「ゴボツ!?!……ガツ……」

そのまま、菅は意識を失ってしまう。それを確認した珠雫は審判の判定を聞かないまま菅に背を向けて歩き出した。結局、珠雫は試合開始から結果が決まるまで一步も動くことは無かった。

黒鉄珠雫：勝因・相手を水没

☆

さて、現実などこんなものでそんなに都合よく強者どうしの戦いな

どそんなに都合よく起きることはない。

しかし、そんな中にも面白い組み合わせはある。第七訓練場、ステラの試合が行われた会場でステラの試合後、一輝は控室で試合の時を待っていた。その姿はさながら、歴戦の戦士のようである。当然、過度な緊張もしていなければ行き過ぎたりラックスもしていない。強いて言うならば自然体の状態で一輝は自分の出番を待っていた。これには当然いくつか理由もあるが、それは試合中に語ろう。

『二年、黒鉄一輝君。二年、桐原静矢君。試合の時間になりましたので入場して下さい』

そのアナウンスが聞こえたとき、一輝は静かに瞼を開いた。

「やあ、逃げずに来たようだね」

桐原が一輝に向かって蔑むような笑みを向ける。当然、その表情には自分が負けるという結末はあり得ないというような自信と慢心が混ざっている。どちらかといえば慢心の方が過大な気もするがそれもしようがないだろう。桐原の能力は広範囲に攻撃できる能力を持った騎士以外に破られたことが無いのだ。近接や近距離の攻撃手段しか持たない騎士に対しての戦闘では無敵、無敗、全勝。どれも同じような意味だが、それらが一概に表していることは一輝が桐原に勝つということは極めて困難であるということだ。当然、桐原は負けるだなんてこれっぽっちも思うことは無い。

その態度に対して一輝は心中で苦笑する。桐原は自分に負けることは今のところ無いだろう。一輝自身もそう考えている。実際、桐原の能力は近接戦において最強の一角と言っても過言ではない。姿を消すということは相手に気付かれず初手の一撃を入れることが出来るということだ。そのアドバンテージは桐原自身が考えているよりも大きい。もし、一輝がその能力を持っていたらとてつもない恩恵を一輝に与えただろう。だがそれは所詮、考えても無意味なことだ。一輝が持つことは実際には無かったし、現実にはその能力は桐原静矢という人間に与えられたものだった。

「桐原君も、今日は試合前からやる気みたいだね。」

「当然さ、この僕の今年初めての晴れ舞台なんだぜ？少しはいつもよりも気分もいいってもんさ」

髪をかき上げながらいう姿はまさしくナルシスト、多分別の世界ではワカメヘアーになっているかもしれない。

その姿を見て一輝は苦笑するが特に変わることは無い。いつも通りの態度で桐原と接する。

「でも、今日はきつちり負けていってもらうよ桐原君」

一輝は表情を引き締め桐原に正面から言う。それは冗談でもなんでもなく、ただ一輝の本心を告げたものだった。

「……。つふ、ふふ、あははははは!!」

それを聞いて桐原は笑いだす。

「君は本当に僕に勝てると思ってるのい!?だとしたら君の脳みそは随分とご立派だな！君には僕を捉えることなんて出来ないさ！何もできず、惨めにこの『狩人』に狩られていくんだな!!」

——試合が始まる。

☆

さて、分かっていると思うが、この世界の一輝は桐原に相對して緊張は過度にはしていない。初の公式戦とはいえ、さすがの一輝でも、いや、この場合一輝だからこそ緊張するだろう。

まず初めに、この一輝も緊張はそれなりにしている。それをある程度調節、管理しているとはいえゼロにしているわけではないということとは忘れてはいけない。

しかし、原作ほどに緊張していることも無い。理由は簡単、こんなことと比較にできないほどのプレッシャーと何度も向き合っている

からである。確かに一輝の公式戦への思いは人一倍強い。それはこの世界でも変わらない事実だ。だが、KOKリーグ世界ランキング第三位に勝利する人物との立ち合いよりかはよっぽど緊張しない。あの本気のプレッシャーは凄い。というよりも凄まじいという言葉がしっくりくる。いつもは好戦的なくせに本気なんてまったく出さない将季の本気のプレッシャーを受けた人物なんてそういないのと思われる。多分、一輝の兄の双子の弟、つまり一輝のもう一人の兄と一輝くらいの物なのではないだろうか。

そして、将季はいつも一輝を受け入れてくれたということも大きい。原作の世界では一輝は珠雫以外全ての人から拒絶されたということが大きかったのだろう。それに、将季に様々な場所に連れていかれて知り合いもたくさんできた。つまり、”1人”という意識が少なくなつた。

そんなこんなで一輝はベストコンディションで試合に挑む。

だが、それで桐原の透明化能力ステルスが解けるわけではない。今現在、一輝が桐原を捉えられないというのも事実なのだ。

——それがどうした。

持っていないのが当たり前。

相手のアドバンテージは数え切れないほどにある。

自分の全力で、自分の土俵で戦えない。

そんなこといつものことだろう。いつも、自分は一人。アウエーで、不利な状況で勝つしかなかった。今回もそれと全く変わらない。自分が真っ向勝負に持ち込めない騎士。そんな騎士はどこにでも、いくらでもいる。兄さんなんて自分が戦ったら極論距離を離して銃の連射で試合終了だ。剣速が鈍るまで体の疲れは少なくともちよつとずつ出て来てしまうのでそこを打ち抜かれてしまう。

そんな負け方は嫌だ。勝ちたい。勝ちたい。勝ちたい。

今は勝てない。——

なら、今の自分を超えろ

その結果、今現在。

「なんで、なんで僕の位置が分かるんだよ!? 黒鉄え!?!?!」

矢を放つ。当然それは透明、しかも一発や二発ではない。しかも自分の気配すらも消しているはずなのに弾かれる、避けられる、斬り伏せられる。

こんなことは経験したことが無かった。彼は常に勝者だった。自分が狩る側で、相手は狩られる側。自分は強いと信じて疑わなかった。

しかし今回の相手はただの獲物じゃなかった。牙、己のうちに鋭い牙を潜めた獣。

はじめは自分の位置も全く分からず、気配を消すと何発も矢が刺さった。

しかし、それだけだった。その後はどうやってかは全く分からないが自分の位置を補足してきいる。放つ矢の数、位置、全てを見抜かれてしまっている。

自分が獲物だと思い込んでいたモノは実際には自分を狩れる方の存在だと認識してしまった。

認められない。自分はエリートなんだ。落第している騎士なんかに負けるわけにはいかない。なによりも自分のプライドが、能力が、全てが否定されるような感覚が嫌だった。

以前の、いや、相手が一輝ではなかったら桐原は試合を降りていただろう。しかし、今回は一輝が相手だ。自分が負けるなど認めるわけにはいかない。桐原は自分のちっぽけな自尊心を守るために、

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

最後まで戦い続けた。

クリスマス・年末特別編

(番外?) クリスマスな休日①

選抜戦初日が終わって数日後、生徒たちの間では大きく分けて二つの話題が話されていた。まずは当たり前だが選抜戦の話題である。特に初日のこと、注目の一年生が多く出場したということもあり話題に上ることが多かった。

曰く、『紅蓮の皇女』は噂に違わぬ強者だと。

曰く、あの名門である黒鉄家の出身である女子生徒はさすがと言わざるを得ない実力の持ち主だったと。

曰く、Aランク騎士を破ったという『落第騎士』ワーストワンは本当に強かったのだと。

当然、それらの噂の中には誹謗中傷も含まれていたが本当の強者たち、例を挙げると生徒会役員などは決してそんなことを気にせず彼ら彼女らが自分たちの『七星剣舞祭』出場の妨げになると考えていた。

そんな物騒な話はさておき二つ目の話題。これは言わずともわかるだろう。全世界共通(?)の話題である。

さて、そんな話題に事欠かない休日。七星剣舞祭出場停止により選抜戦に出場することもできずに暇を弄ばせていた戦闘凶MODE休暇中であることが無い黒鉄将季は今何をしているかというところ。

「すう…すう…」

——寝てた。

皆さんお忘れかもしれないがこの男、入学式の日普通に寝坊する男である。基本バトルジャンキーなのでこういう風な日常パートになると寝るか食うかしかしていない。食うと言ってもその辺のファミレスやコンビニの物を食べているのだが。無論、寮生活なので食堂に行けばご飯は食べられる。しかしこの男、注目されるのが嫌だから

ということとで高校生活中数えるほどしか食堂に赴いたことが無い。自分の注目度は結構分かっていづつもありなので一度は我慢してみようかとも思ったが、一度感じたことは変わらないらしく周りの生徒がこそこそとしているとケンカ（決闘）を吹っ掛けてやろうかと思ってしまうその決意は泡沫の泡と化した。

そんな金使いまくりな生活を高校生が送れるのかという疑問もあるだろうがこの男に抜かりはない。バトルジャンキーだが必要なことは最低限分かっている。具体的には自分の能力を使いとある山中の高級ホテルに海の幸を届けるといふバイト（？）を高1のころにやっついて、さすが高級といふべきか彼の預金通帳には丸が七つ並んでいる。恐るべし海の幸である。なお別の口座には外国を旅しながら稼いだ丸が9つ並んだ通帳があるのは秘密である。

ピンポーン

家の玄関でチャイムがなった。来客だろうがこの男は起きることは無い。

ガチャツ

ドアが開けられた。人が一人将季に近づいてくる。

ポスト

入り込んだ人物は何をするわけでもなく魔力で距離を相殺しベッドの中の将季の隣に潜り込む。

「すう…すやあ…」

寝息が一つ増えた。

☆

………

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ。俺が目覚めると目の前に小さな女の子が居たんだ。な…何を言っているのかわからねーと

思うが俺も何をされたのかわからなかった…。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

ふざけてみたけどこれ目の前のエレナだし別に驚かないな。なんで休日こんなところにいるのかとか疑問は出てくるが、友達と遊んだりしないのか…？

「んう…すう……」

俺が起きて同時に起きるなんてラノベらしい展開が待っているのかと思つたがそんなこと全然なく気持ちよさそうに寝ている。今日は別に特段やることも無いと思うしゆつくり二人で寝てればいいかと思ひ直し目をつぶる。

数分後、また寝息が二つになった。

a few hours later ……

数時間寝て完全に眠気が覚めたのでエレナをベットに寝かしたまま朝食を食べる。一回起きたときは九時か十時くらいだったらしくもう昼ご飯という時間でもあるので冷蔵庫の中から昨日買った野菜のサラダ（切つてあるだけともいう）と冷麺を出して食べる。基本出来ている物しか食べないので野菜は食べるように心がけている。例えばサラダとか（切つてあるだけ）サラダとか（細かくきざんであるだけ）とか……。

サラダしかない気がするがそこは置いておこう。そんな悲しい一人飯を食べているとエレナも目を覚ました。

「ん…、んう……。ふああ？」

目をこすりあたりを見渡しているあたり自分がどこで何をしているのか思い出せないのかもしれない。

「あれ……？」

首を傾げながらこちらを向くので状況を説明する。それが終わっ

たところに・はもう元気に置いてあった店売りのあんぱんを頬張っていた。本当に子供は元気なことで。

「ああ！今日はお兄ちゃんと遊びに来たんだ!!」

子供らしい満面の笑みを浮かべながらそういうのでどうするか考える。一輝たちは今選抜戦でコンディションを保つために軽い運動（10kmくらいのランニング）をしているくらいだろうか。自分はもう近日に戦闘する予定はないしあまり前準備とかは否定する気もないが必要はないと思っっている。奇襲などに反応できないのは自分の落ち度だし、人間生きている以上毎日が戦いという。故に自分は常時戦闘可能だし遊ぶのもいいかと思う。他の知り合いは……、あれ？俺一輝くらいしか友達ってかそういう関係の人居なくねえか？お、落ち着いて考えるんだ。友達…友達……。教室で話すくらいならまだしも遊びに行くような関係のやつ…いねえ……。そもそもいつもすぐ帰ってきてたな。青春って何だろうって再確認させられるなあ……。(遠い目)。高校生活ってもつとこう、華やかな感じじゃないのか？一輝なんて皇国のお姫様と兄大好きな(一輝限定)妹と遊んでるんじゃない(訓練)ないのか？

こう考えてみるとエレナの誘いってすごいありがたいな…。やはり幼女は天使だったのか(悟り)。

「ああ、じゃあどっか遊びに行こうか」

「やった!!今日外は綺麗だよ!!」

天使が外に飛び出していく。やはり俺の高校生活は間違っているのかなあ。旅を続けていればよかったか…。エレナとイングナしか遊びに行くような人いないし、悲しくはないけど。青春なんてこんなものなんだ。

そういえば綺麗とは何かということを聞く前に家から飛び出していったので少し気になる。とりあえず食器を水に付けるだけして服を着替え外に出る。

「わお……」

外は自分が予想していかないくらいの装飾度だった。店という店の前にはモミの木が置いてあり街路樹には電球がついている。大きな店の壁にはライトアップで雪だるまやトナカイが光りで描かれている。道という道にはカップルの姿や悲しい独り身同士で同盟を結んだのか出かけている男や女たち、店の呼び込みだろうサンタの格好をした人もいる。

「今日はクリスマスだからね!!あたしも好きな人と出かけたかったのだ!!!」

元気に跳ね回っているエレナ。年相応のはしやぎようを見ることが出来てうれしい限りだ。なにせ少し前まで動くこともかなわない状態だったのだから。まあ好きな人云々は子供の言うことと流しておく。苦笑しながら二人で歩いていると電話がかかってきた。相手はイングナだ。何だろうと思いつながら電話に出る。

「もしもし、俺だけど。なんかあったか?」

『あ、将季?今日は暇?』

エレナがここにいる時点で知っているんじゃないかと疑問に覚えただがとりあえずエレナと出かけていることを知らせる。

『……………マジ?』

「まじまじ」

そんなやり取りをしているとイングナはぶつぶつ独り言を言い始めたらしい。電話越しだと流石に聞こえない言葉を言い終えたのかこつちにすぐ来るといい電話を切る。疑問に思ったが気にしないことにした。エレナに話すと、

「(…チツ) そうなんだ。はやくいこいこ!!」

はじめに顔をそらしていたが何を言ったかまではわからなかった。とにかく、確かにここにとどまる理由もないので移動を始める。

街を歩くと遠目からひそひそささやく声が聞こえる。自分は有名なのでこういう対応は慣れている。というか慣れなくては毎日ストレスが溜まっていってしまう。それだけこの世界では魔導騎士が有名なのだ。戦争を終わらせた存在であり、一般人とは隔絶した力を

持っているのだからそれも当然か必然か。競技としても派手さにおいて右に並ぶスポーツはない。最近は平和なので一般人は平和ボケしているのかもしれない。そんなこんなで自分の知名度。顔の売れ度は半端じゃない。こつちを見てキヤーキヤー言うのはやめてほしい。

「エレナ、とりあえずどこいく?」

「んー?カラオケ!!」

て、天使は意外と腹黒かったようだ。

なぜかと問われるとイングナさん、超音痴である。俺から見ても可愛いし、優しいし、妹思いだし、ハイスペックな女の子なのだが音程がなぜか合わない。あと服のセンスがない。男の俺から見てもダメサ。あれは昭和のファッションである。絵のセンスとかはあるので芸術のセンスが無いわけではないのだろうが本当にこの二点・は数少ないイングナの弱点なのである。よってカラオケなんてほとんど行かないし服はエレナがチョイスしているほどだ。家にイングナの選んだ服は一着もない。ていうかあつたらそれを着るし、そうならエレナが恥ずかしいので買ったものから捨てていると聞いた。

だがなかなか行く機会もないし行ってみるかと決める。イングナに向かう先を乗せたメールを送り二人で歩く。エレナは周りの視線など気にもしていない様だ。その周囲気にしないスキルが欲しいと心の底から思いながら足を進めた。

☆

「ジングルベルジングルベル、鈴がーなる——……」

イングナさん もっと音を 聞いてくれ

将季心の俳句@

当然人の向き不向きが急に変わることも無く、合流してからずっと

イングナはその音痴な歌を披露している。そもそも歌っている曲も子供の歌だし。もつと山風とかS B Y 9 6とか(渋谷)、アニメの主題歌とかでも水木七の歌とかにすればいいのに。この世界でも日本のアニメは人気がある。ジャンル的には機械が出てくるS F系が人気の中心だ。魔法とかのアニメはこの世界ではブレイザーの存在からあまり流行らなかったようだ。特にG C O (ガン・クラフト・オンライン)とかガン〇ムとか人気である。

そんなことを考えているうちにマイクはエレナのもとに、彼女は歌は普通にうまい。しかも小学生なのに流行りの曲をチョイスしてくるところがいい。さらに追加で85点を下回らない。カラオケは彼女の独壇場となった。俺は普通に80点位が平均なのでそこそこに歌っている。エレナが新しい歌に入るところでイングナが話しかけてくる。

「ねえ」

彼女はこちらに真面目な顔で話しかけてきた。珍しいことで、彼女がこんなに真面目に話しかけてくるときは大切な話の時なのでしっかり耳は傾ける。

「エレナのこと、本当にありがとう」

「それはもう終わったことだろ。大体、俺がやりたかったことをやった結果なだけだ。感謝なんてしてもらおう理由もない」

顔を背けながら答える。俺の中では三・四割は自分のためだったので嘘ではない。

「じゃあ。私たちを結果的に救ってくれてありがとうございました。黒鉄将季君。あんなに元気なエレナが見れるなんて四年前は思ってもいなかった。本当に、私たちは嬉しいです」

そんなことを言いだすので、久しぶりに外国を旅して周っていたころのことを思い出した。

(番外?) クリスマスな休日②〜回想I〜

「んー。アメリカ初上陸だな!!いやあ、M I 6に会ったときにはどうしようかと思っただぜ」

アメリカの東海岸について背伸びをする。距離を縮めて誰もいないことを確認してイギリスから跳んだので色々な意味で大丈夫なはずだ。

なお、この伐刀者^{ブレイザー}がいる世界でも警察組織は一応存在している。最も荒事関連は国際騎士連盟が担当しているが、法での統治がなされている以上その法が破られていないかを確認する組織が必要なのは言わなくとも明白なことだ。この世界のイギリスとアメリカは敗戦国なので日本のことは一方的に敵視している節があるが、表面上は連盟に加盟する国同士仲良くする体を保っている。そんなジャパンバツシングオールデイズな国にいたのもロンドン観光がしたかったのである。とても。

タワーブリッジやロンドン塔は健在だし、大英博物館やバッキンガム宮殿はさまざまな資料があって楽しかった。日本が戦勝国になったといっても欧米が直接爆撃を受けたということではない。むしろ日本側は爆発物を敵国に送ることなく伐刀者^{ブレイザー}の力で戦争の勝国になったので戦争の総被害は俺の元いた世界よりもずっと少ない結果に終わっていた。

と、話が変わるがこんな有名な観光スポットを回っていればカメラに顔が映るのも当たり前前で、国際手配されている犯罪者の俺は追い回される羽目になったわけだ。一般人の目のある中でいきなり襲ってくるようなことがなかったため予想以上に楽しい観光だった。以前ロシアを訪れた時などなりふり構わず俺を捕まえようとしてきたので返り討ちにするのも面倒なくらいだったのだ。つたく、十五歳の純粹な子供を黒服の怖い顔したおじさんがおいかけてくるなんて、なんて常識のない行動をとる国なのだろうか。

町のほうに歩くと海辺だからかあまり人がいない。俺が上陸した

のは、地図が正しければロングアイランド島というニューヨークに接する島なのでゆっくりアメリカ最大の都市を目指そうと思っている。まあ、人気がない朝方の時間に能力を使ってショートカットすることはあるが極めて健全な徒歩の旅を楽しむでしょう。

☆

「Thank you letting me stayed.」
「It's my pleasure. Your talk gets S O

その挨拶だけを済ませて宿を出る。宿泊するときには宿の主が面白そうな話を聞くのがこの仕事のやりがいだと言っていたので、俺が旅してきたいろんな国の感想や体験を話したわけだ。そしたら予想以上に人が集まり宴会気分になったのは反省だ。ビールを飲むは散らかすわで昨晩は大変だった(未成年の良い子の皆はお酒は飲んじやだめだよ!!)。宿泊客の大半がノリのいい人でなんやかんや楽しかった。

なお英語は覚えた。前世でも日常会話くらいは問題ないくらいに覚えていたし、この世界では他にも中国語やドイツ語は覚えている。だてに中学に通っていないわけではないのである。

「さて、今日は銃を見に行ってみるか」

アメリカにきた理由その一である。この伐刀者の数が国力であるご時世にも銃は出回っている。むしろ伐刀者の存在により規制が緩くなっているのではないかと思うくらいである。もちろん、空港などにはちゃんと火薬を識別する装置もあるし、商店には緊急のための警察組織に知らせるベルもあるのだが、銃の所持に関しては前世ほどどうもさく言われることは無くなった。アメリカでは非伐刀者の約9割5分にのぼる数の拳銃が所持されている。前世でもアメリカの銃所持率は80%を越えていたが、この世界ではほとんどの人が銃を所持

しているという計算になっている。もちろん、《解放軍》への苦肉の対抗策として持たせることにしているという話もあるが、日本でも銃の所持者が30%を越えているのがこの世界の危険性を表しているだろう。

そんな殺伐としているようなご時世だが、やはり銃と言えばアメリカという印象が強かったので、そのアメリカに來たからには銃を見てみたいと思った。場合によっては今の「花火」よりかっこよくなるかもしれない。俺の固有靈装はかっこいいものがないなあという思いが強い、と個人的には感じているので感銘を受ければ形状は簡単に変わるかもしれない。今まで犯罪者を何人か捕まえたことはあるが、そいつらの持っていたのは総じてアサルトライフルなので参考にならない。やはり拳銃スタイルがかっこいいと思っっているので、今の形は前世の記憶が強く顕れている気がするし変わった方がいいかもしれない。いや、その記憶が強く固有靈装に表れているからこそその形なのかもしれないが、試してみることは大切だと思うので少し暗い町の中に足を踏み入れる。

やはり犯罪の抑止力の大半が伐刀者ブレイザーになったので銃の販売は後ろ暗い仕事になっていようだ。スラムといえるような立地の場所に銃の販売店はあった。ここ以外にもあるにはあるが遠くなるようだし、ここよりスラムの中心に近いという。厄介ごとに自分から突っ込む自覚はあるが弱い者いじめをするのが楽しいわけではないのでここではスラムには極力関わらないようにしよう。

中に入るとショットガンやライフルなどの大型の銃は壁などのケースに並べて展示され、ピストルなどの小型銃はカウンターの鍵のかかったディスプレイケースの中に入れられている。ショットガンは興味ないしライフルはもつと興味が無い。よって奥に入ることはしないことにし、ディスプレイケースを見て回り始める。店員は珍しく女の人が一人でやっているらしく他に人も見当たらない。アメリカ人にしては珍しい茶髪で腰までストレートに伸ばしている。身長

もなかなかあるらしく座っているだけでも様になっている。

「アンタ、日本人？」

拳銃を見ていると店員から声がかかった。日本語を聞くのは久方ぶりなので少し驚いて返事をする。

「あ、ああ。あんた日本語話せるんだな」

「ああ、たしか1／8日本の血が通っていてね。言葉は色んなのを覚えていただけよ。そんなことよりアンタ、ガキがこんなところにくるんじゃないよ。見たとこまだハイスクールの生徒でしょ」

どうやらこちらの心配をしてくれていたようだ。あと俺は年的にはジュニアのほうだが。

「ああ、気にしなくていいよ買うつもりはないし。あと、俺は一人旅のついでに寄ってみたちよつと変わったお客様だと思えばいいよ」

それを聞いて驚いた表情を見せる。

「アンタ、一人旅ってどこから来たんだ？ワシントンとか？」

「いや、日本在住だよ。方法は聞かないでくれ」

そんなことをいうとこちらに興味を持ったよう立ち上がった。こちらに来る。……うん、すごい俺が見ても綺麗だと思う。というか、彼女も俺とそう変わらない気がするんだが。こんなところの店員していて大丈夫なのだろうか。

「何歳なのよアンタ？」

「十五だよ、そういうアンタもこんな商売でアルバイトする年齢には見えないんだが？」

「十六、この国じゃ立派な成人よ」

一歳の差しかないことに驚いた。この国じゃこんな子供が働いているのか……。

「俺は黒鉄将季、将季でよろしく。あんたは？」

「イングナよ。ん？黒鉄って聞いたことあるような……」

やはり黒鉄の名は世界に響いているらしい。正直爺さんの威光はあまり好きじゃない、親の七光りに見られたりするし。

「さあ？なんかと混同したんじゃないか？」

「まあ、いいか。ところでなんで将季みたいなのが銃なんてものを見

てんの？」

「ああ。知られても困るもんじゃないが」

少しためらうが銃が固有^{デバイス}な装なんてアメリカ人にはよくいることだと思おうので銃だけを展開する。

「刀伐者^{ブレイザー}だったのね将季。それで実銃が見たかったの？」

「ああ、拳銃なんてあまり見たことなくてな。このアメリカという銃大国に訪れた機会にと思ったわけだ」

それだけ話すと「花火^{はるか}」を消失させる。

そのあとイングナはその他人行儀な態度とは裏腹に、こちらにかなり丁寧に銃について話してくれた。銃を手入れする機会なんてなかったのもそのあたりは新鮮だった。所持するわけではないので役に立つ機会は来ないと思うが勉強にはなった。分解しないと火薬がたまって危なくなったり、動作不良を起こすので注意が必要なんだそう。

ちなみにイングナは親がこれを扱う仕事をしていて、それで今、この店の店主なんだそう。両親は何年前に亡くなられたらしい。それ以上はプライベートに関わるのも悪い気がしたので聞いていない。

「ありがと、参考になったよ。今後扱うことは無い気がするけど勉強になった」

「いや、私も年の近い子と話すのは久しぶりだったしいい気分転換になった」

店のなかで礼を言って店を出——ようとして誰かが入ってくるので避ける。見たところ黒い服の何の変哲もない男だが、俺の長年の戦闘の感覚に引つかかるものがあった。銃を見ることを続行し能力を発動。周りからの認識距離は変わらず、イングナと話している黒服の声が聞こえるようにする。

「次の依頼だ。金はいつも通りの場所に振り込む」

「あんた、一般の客がいるのにそんな話をするの？いいんだけど、あの子の状況はどうなの？」

「あそこまでは聞こえんだらう。手は尽くしているがまだ駄目だそう。変化があれば連絡が入るだらう」

「……それもそうね。とにかく了承したわ。とつとと帰って」

——これは面白そうな気配がするな。

(番外?) クリスマスな休日③〜回想Ⅱ〜

イングナは箱の中に入ったアサルトライフルと弾丸を確認していた。

この絵面だけ読んでみると普通の銃の商人に見えるが、彼女が今日売りに行くのは解放軍^{リベリオン}の支部にである。その商売にはとある事情があるのだがここでは触れられない。ただ、テロリストに武器を流していると警察組織に知られたら指名手配ものなのだが、そこは知られないように対策があるので大丈夫だろう。

イングナが車でとあるビルに乗り込み、受付でキーワードを言って荷物を持ちながら建物の中を歩いていたのだが、妙に違和感がある。特に確信があるわけではないがこういう直感の仕事柄大切だと経験しているので気には留めておくことにする。

この建物は世間一般には土地管理の会社なのだが、解放軍^{リベリオン}の息がかかった仕事をしている会社といった言い方が正解である。地下には一般には知られていない空間があり、そこを、解放軍^{リベリオン}の支部として利用している。そこでは武器の取引や薬をはじめとした非合法の取引が行われている。イングナも武器の売り渡しに来たので、現在その取引が行われている広間に向かっている。イングナはもう何度もそこに入ったことがあるので慣れたものだった。

しかし、取引に使われている広間の前までくるとイングナの違和感^{リベリオン}は確信に変わっていた。

社内を歩いていて誰ともすれ違わなかったのである。これはおかしい。このビルは普通にと行っていいのかはわからないが解放軍^{リベリオン}の活動のための資金を集めるためにまつとうな(?)商売をしているので、平日の昼に誰とも廊下ですれ違わなかったのはおかしい。一応、受付の人がいたのでこの建物が国際騎士連盟にバレて、ガサ入れが行われたわけではないことは確かだ。よほど大きな取引でもしているのかとも考えたが、そんな日に自分に武器を売りに来させないだろうと思う。

自分の固有^{デバイス}霊装を手の中に忍ばせておき、ドアをゆっくり開ける。

中に人はいなかった。いや、よく見てみると気を保っている人が一人もいない。中にいる人は全員気絶して、床に寝転がっている。その姿に外傷が全くないことから、これをやった人物は相当の腕利きだとわかる。外傷が全くなく気絶しているのはおかしく見えるが、固有^{デバイス}霊装の幻想形態でやられたと考えればわかる。自分は部屋の中心に速やかに移動する。相手がどんな能力を持っているか分からないが、奇襲を一番受けなれないと思つたゆえである。

部屋の中に入り警戒し始めて数秒で建物の奥のドアが開く。まるでこつちのことを待っていたようで不気味だ。警戒を怠ることなく、そちらに注意を向けておく。

その扉のむこうから来たのは、昨日店にきた変わった客の姿だった。両手をポケットに突っこんでいるのだが、隙は全く見当たらない。

「アンタ、国際騎士連盟の人間だったりするの……?」

この状況からするとそれが一番自然である。まず、中学生一人で旅をしているという事実が怪しいし、こんなに効率的に解放軍^{リベリオン}の支部を壊滅させることが普通の一般人にできるとは思えない。

だが将季は首を振る。

「ちがうけど、今はそんなことどうでもいいだろ。《貌無き婦人^{フエイスレス・マダム}》さん、俺と戦ってくれよ」

将季は気持ちいいくらい笑顔で言い切る。その言葉と同時に、二人のいる部屋の中心と壁までの距離がいきなり離れた。

☆

イングナはいきなり部屋の中が広く感じ少し驚いたが、そういう能力なのだろうと自分を納得させる。距離を変化させる能力など今ま

で聞いたことは無かったが、そういう能力者がいてもおかしくない。もとより伐刀者^{ブレイザー}同士の戦いとは、相手の能力が分からないほうが多い。ルールの決められた競技ならともかく、解放軍^{リベリオン}と騎士連盟との戦いではルールも騎士道精神もないのだ。こんなことは慣れきっている。

イングナは自分の能力である“光操作”で自身の周囲の光を屈折させ姿を消す。イングナは正面からの勝負が得意な伐刀者^{ブレイザー}ではないが、奇襲や乱戦ではある程度自分の実力は高いと自負している。姿を消せば相手に気付かれる前に一撃を致命傷になる個所に入れれば終わりだし、乱戦でも注意が向いていない相手に攻撃を気付かれずに入られる。当然、自分のステルス能力に自信を持っている。しかし方もそれなりに研究したと思う。

その、今までの経験をいかし相手に気付かれないように後ろに回る。現在は5メートルほどの距離があるが、まだ将季はさつき自分がいたところを見ているので、気づいていないと思われる。一撃で終わらせるために細心の注意を払い、ゆっくり近づく。

「っふ——」

しかし、当然ながら目の前にいたのはそこらにいるような実力の人間ではなかった。約2メートルを切ったほどでイングナのいる方へ向き銃を放つ。イングナも迎撃されるのは想定していたのでサイドステップから距離を取り直す。事前に武器が銃と知れていてよかった。初撃はノーダメージで避けられた。イングナは光学迷彩は有効ではない、と判断し姿を現す。

「なんで位置が分かったのかしら？これでも自信があつただけだ」

「音まで消せていたわけじゃなかったからな。一撃で決めるって姿勢は良かったと思うぞ」

将季は片手ポケットに突っこんだまま、銃を左手でぶら下げている。その眼は狩りをしている肉食動物のように爛々と輝いており、イングナをまつすぐ見据えている。

イングナは自分の右腕に相手には分からないように、固有^{デバイス}霊装を握

りこむ。当然、戦闘方法がこれだけなら裏社会で二つ名までつけられるわけがない。その場で光を操り光弾をいくつか作り出し将季に向かって撃ち出す。将季は当然のようにそれらをすべて銃で撃ち落とした。だが、こつちから少しだけでも視線がずれた。姿を再度光学迷彩で消し、光で獣の形を作り出し将季に向かって走らせる。細かい動きを取らせることはできないが、敵に向かってまっすぐ攻撃させるくらいはできる。その中に一体だけ自分で操作する狼を混ぜておき光でできた獣軍団を突撃させる。

将季はそれを見てたいした芸風だと思った。光に質量を持たせることでも十分すごい。光をはそれ自体質量を持たないので、攻撃手段としては悪手である。しかし、さつききた光弾は自分に当たらずに床にぶつかったとき、床を少しえぐっていたので物理的な攻撃力も持っているのだ。ただの光る魔力弾と侮っていたらいけない。さらに動物を作り出しているので、魔力制御が桁外れにうまい。しかも数は二、三ではなく数十体の集団なので、これは避けるだけではダメかと判断し、右腕をポケットから出す。

まず突つこんできた狼は右手の掌底で叩き消す。左右から大型犬が突つ込んでくるので左は銃で、右は肘打ちで対処する。どうやら光の獣は魔力をぶつけると消えるようなので掌底や蹴りには魔力を込める。魔力操作の基本ができていればそう難しいことではない。

そして、俺の徒手空拳の戦闘スタイルはみなさんご存じ八極拳だ。(知らない人は八極拳やマジカル八極拳で検索) この世界に生まれてから、俺は当然中国にも行ったことがある。そこで李書文先生の子孫や弟子がいなかったかを探していたのだが、いた。存在した。あの「二の打ち要らず」、「神槍」の名を持つ究極の武人の弟子を見つけることができ、そこで教えを受けたことがある。「圏境」と呼ばれる世界と一体化し気配を消すという真髄まではまだ至れていないが、重心移動や体勢の急激な展開動作は完全に習得できたので素手での戦闘もできる。李書文先生の弟子によると俺は才能があつたらしく、手や体、膝から

浸透勁の一撃を打てるようになった。

そして、世界と一体化することを目指すということは自身の周囲の気配に敏感になるということでもあるので、基本的に不意打ちは受けない。今、こうして動物を吹き飛ばしているなかで一匹だけ明らかに動きが違うやつがいるのでその狼に突っこむ。攻撃対処に徹底していた俺が自分から動くとは思っていなかったらしく、一瞬目をつけていた狼の動きが止まる。その一瞬を見逃すほど馬鹿ではない。掌底を叩き込み魔力を四散させる。

そして、動揺がここまで伝わる。その動揺は命取りだ。命のやり取りをしている中で動きと思考を止めれば負ける。戦士としてはまだまだだったなと思いつながらイングナのいる位置に数発の弾丸を打ち込む。

弾が命中し、幻想形態で撃ったのでイングナが気絶する。手からなにやら筒が落ちたようだが消えた。ということは今のがイングナの固有霊装だったのだろう。あまり、楽しくはなかったが暇つぶしにはなった。あとはこの建物の中にいる全員を気絶させて、匿名で警察にでも連絡を入れておこう。

この日、今まで見つかることなかった解放軍リベリオンのアメリカの支部が一つ潰された。当然、市民の反応は大きく、当の解放軍リベリオンの幹部の動揺はさらに大きかったようだ。

(番外?) クリスマスな休日④〜回想Ⅲ〜

「……んっ」

イングナは久しぶりにゆっくり寝た、という感覚を持ちながら目が覚めようとしていた。

親が死んでからこれまで、気持ちが悪く時間がなかなかかっただと思う。残っている唯一の肉親である妹は入院しているため、ほとんどコミュニケーションを取れていない。さらに自分が関わりを持っているのは解放軍というテロ組織だけ。人と話すだけでも気がたつ毎日であった。

だから意外とあの少年と話すのは楽しかったのかもしれない。武器の話を中心にしていたが、彼に外国の旅について聞くと自分の疑問すべてに答えてくれた。外国に旅する余裕なんてなかったなので、彼の話は新鮮だったし楽しかった。

「……い。おーい、起きろー」

「んや…」

意識が覚醒する。目の前には昨日初めて見た少年。ここは車内のようだが……。

「えつと、何が……?」

寝た記憶もなければ、どうしてこの少年と車に乗っているのかも分からない。自分はどうして車なんかの中で寝ているのだろうか。

「えつ。…覚えてないのか?」

少年、たしか将季がすごい驚いている。そこまでのことがあったとは……。

——あつ

「あんたなんで!?というかこ「おちつけ、おちつけ」!?」

ようやく気絶前のことを思い出した。解放軍の支部に銃を売りに行ったら壊滅状態で、この男と戦って負けたのだった。というかこの男、何者なのだろう。あの獣軍団、通称『アニマルスタンピード』を素

手で消し飛ばすとは。普通に一般人やめているのではないだろうか。いや、伐刀者ブレイザーは一般人ではなかったか。

「とりあえず、俺がイングナさん？を気絶させたところまではOK?」
「OKよ。あと、イングナでいいわよ。一歳差なんてあってないようなものじゃない」

「了解。イングナを気絶させてから、とりあえずビルの中にいる人全員気絶させて一か所にまとめて縛っておいた。あとは公衆電話から連絡。連絡した内容はガラスが何枚も一気に割れたってこと。これなら悪戯には思われないうし事実だし。今頃ガサ入れされてるんじゃないか?」

…この少年、意外と行動力があるというか無茶苦茶だ。なぜやることなすこと全てが前向きに天元突破しているのだろうか。あと縛るってどこから紐かロープかだしたのだろうか。

「そう。で、なんで私は車の中にあなたといえるの?」

「会社の中で聞いたら普通に武器を売ってただけだったし、運がいいことにこの国の解放軍リベリオンの他の支部に喧嘩売りに行けそうだから足がほしかったしな。拷も、げふん、質問によるとイングナも訳あって解放軍リベリオンに銃を売り出していたみたいだしな。別に俺は解放軍リベリオンの壊滅とかを目指しているわけじゃないし、犯罪者全員捕えるなんて自分が犯罪者だから意味不明だしな!!」

ハツハツハツハと快活に笑う将季を見ながら驚く。

「あんた、犯罪者ってどういうことよ?」

「ん?ああ。俺の能力が距離を操る物だってことはもう分かるだろ?それで世界中旅してたら指名手配されてな!一般には広まってないが警察上層部だと有名だぞ。あの“黒鉄”の子供が世界中飛び回ってるってな!!」

またも笑っている将季を見ながら、“黒鉄”についてここで思い出す。

「あ、あんた!!黒鉄って“サムライ・リョーマ”の!?”

「おう、俺の祖父だったか。俺はあんまり話したこととかないんだけどな」

“サムライ・リョーマ”を知らない人はいない。なにせ第二次世界大戦の英雄だ。それならあの強さも納得できる。というかなんでパスポート取って旅していかないのだろうか。それなら犯罪者で知らない理由も納得だ。どうせ“黒鉄”がもみ消しているのだろうか。指名手配までは撤回させられていないが、世に広まることを止めることくらいたやすいことなんだと推測できる。

色々な情報が出てきたが整理すると、

- 1、将季はあの“黒鉄”の家の出身
- 2、世界中を旅してる
- 3、2の結果指名手配される（パスポートも用意してないのだから当たり前）

なんだか目の前の少年がとても馬鹿に見えてきてしまう。その割にまだ逮捕されていないから悪知恵だけははたらくのだろうか。

「とりあえず分かったわ。あそこに私につながる書類とかはなかったはずだから、一応ここで生活してても大丈夫だと思うし」

「つあ。完全に忘れてた。すまん」

やはり先行きが心配になってしまふのは仕方がないことなのだろうか。

☆

車はもともとイングナの店に着けてあったので、車庫に入れ店の二階、イングナの家に入二人で入る。将季は女の子の家に入るのは何気に初めてなので少しワクワクしていたが、イングナの家にはなんとというか無駄なものがほとんどなかった。リビングに丸テーブルとソファ、テレビ台とその上にテレビ。イングナの私室を覗かせてもなかったところベッドとデスク、去年まで使っていたら勉強道具が置いてある本棚。まさに生活必需品しかない最低限の生活スタイルだった。見つけられたのはイングナと年下らしい少女が二人で映っ

ている写真が入った写真立てぐらいだ。

「なあ、イングナ。この写真って何だ？」

写真を持って聞いてみる。イングナはさつきまで寝ていたからお腹が空いているらしく冷蔵庫をあさっていた。写真を見せると苦い顔をしたがしぶしぶといった感じで答えた。

「それは私と妹よ」

「え？似てないんだな」

「うるさいわよ。私が先祖返りでアジア人っぽいだけなんだから。父や母に似ているのは妹の方なの」

冷蔵庫に食べ物はないのかミネラルウォーターを出し、ソファーに腰掛けるイングナ。その表情は憂いに満ちている。

「妹は生まれつき体が少し弱くてね。親が死んじゃったときに体調を崩したんだよね。その時から入院しちゃって。今は解放軍リベリオンの関わりしてる医療施設にいるの。妹の入院費についてあいつらと交渉してね。私が銃を流したりたまに力を貸すから妹の医療費を少し勉強させてくれて。そんなわけだから私は解放軍リベリオンに頭があがらないのよ。結果、裏社会にどっぷりはまっちゃった」

将季は眉ひとつ動かさずに聞いている。

「それで、暗殺なんて初めてして。最初は吐いたわ。でも、何回も殺しているうちに慣れてくる。警備は私の能力だと割と簡単に突破できるしね。まあ、そんなどこにでもあるような不幸話がイングナちゃんの実態でした。って、なんで昨日会ったばかりの人にこんなこと話してるんだろうね」

イングナはミネラルウォーターを飲みほしペットボトルを捨てる。

将季は壁にもたれかかりながら考え事をしていた。

「それで、将季はどうしたいの？解放軍リベリオンの基地を教えるだけならいいわよ。お金なら今まで貯めてきているから何とかなるはずだし。これまでがズルして楽しんでたんだから。捕まらなかつただけ幸運よね」

将季はそれまで考えていた顔をゆっくりあげてかみしめるように返事をする。

「イングナ。一つ聞きたいんだが、妹って両親が亡くなるまでどのく

「らしいの病弱だったんだ？」

「えっ？…そうね、日本でいうぜんそくみたいな感じかしら？すぐに咳き込むし、一年に数回風邪で寝込んでたわ」

将季はそれを聞き、壁から離れると、

「分かった。少し調べたいことができたからとりあえずイングナが知っている限りの支部の位置と妹さんの入院している病院の位置を教えてください。別に手を出すわけじゃないから」

イングナは少し悩むがもとより自分は将季に見逃してもらった身だ。地図を引っ張り出してきて四か所に丸を付けた後、一か所、妹の入院している病院をマーカーでしるしする。それを将季は受け取り、「じゃあ、二、三日したらくるからそれまでまっとうな商売でもしててくれ」

といい出ていく。話の途中から何やら考えていたようだがイングナには分からない。とりあえず、自分と最愛の妹にくる被害が最小限で済めばいいとこの時は思っていた。

(番外?) クリスマスな休日⑤〜回想IV〜

将季と戦ってから二日、イングナは特に変わることはない日常を送っていた。もとより銃の店なので、頻繁に客が来るなんていうことは無く二、三丁の拳銃を銃弾と共に売ったくらいである。なお、買った客はいずれも二十歳くらいの男性で、銃という武器を玩具かなにかと勘違いしていそうな男どもだったが客であることには変わりないので、ちよつとふつかけて売った。

テレビを見ていると私が教えたビルの名前が拳がっていたが私は何も知らない、いいね。

解放軍リベリオンの支部がどうたらこうたらで、国際騎士連盟は発見した人物を特定できていないなどの報道があつた気がするが、何も関係ない。そんな何も変わらない日常の一時を過ごしていたイングナだったが、そこに一人、変動を促す人物が店に入ってくる。

「将季、手は出さないんじゃないか?」

「なんだ?俺がテレビにでも出ていたか?俺は知らないな」

真顔で言い切っているが、明らかにこの男の仕業である。イングナは少しイラツと来るが、今はそこが重要なのではない。

「それで、あなたは何か気になることがあつたんでしょ?アタシに関わるのか知らないけど、報告に来るつてことは何かあるんでしよう?」

イングナは話を進める。実際、足が必要だなんだと言っていたが将季は位置さえわかれば移動手段はいくらでもある。車を運転していたから免許は取っているのだろう。あとは電車やタクシーでもいい。人目につかなければ彼自身の能力で移動することが可能なのである。いや、よく考えてみればパスポートを取らずに世界旅行しているくらいなのだから免許なんて持っているはずがなかったか。

それはともかく、将季がイングナに関わる話があるのは明らかなのである。

将季は持っていた茶色い封筒(B4サイズらしきもの)をイングナに投げ渡す。

「それが真実だ。イングナの話には不自然なところがあつたからちよつと潰しながら調べてみた」

将季は顔を歪めながら言い捨てる。イングナはそれを不自然に思いつながら封筒の中身を取り出す。中には何枚かの紙。

それを読み進めていき、

イングナは事実を知った。

☆

解放軍リベリオンのアメリカ本支部であるニューヨークにあるとあるビルの地下では、黒衣に身を包んだ数名が焦った様子で会話していた。

「また支部がやられたそうぞー！」

「犯人は分からのか!？」

「次はどこが狙われるやら」

男たちは解放軍リベリオンの幹部である。いずれの人物も伐刀者ブレイザーであり、国際騎士連盟の基準ならば魔力は最低でもCランクはある。さらにこの中の一人に至ってはAランク相当であろう魔力をその身に秘めている。

「落ち着け」

一際体の大きな人物が言い放ったその一言で場が静まる。どうやらその男がこの中で一番大きな影響力を持っているらしい。

「相手はまだわかっていないが、警察組織が本気で討伐した人物を探していることからそういう組織に所属している人物ではないことが分かる。上層部に行くほど手柄の取り合いになる愚物の集まりだからな」

警察とは民の安全を守るという言葉掲げている組織ではあるが、そこに権力、利権がからんでくると人間やましいことがでてくるものである。末端の人員は真面目に職務に励むのに対し、上層部は下の者

たちを働かせるばかりで、自分たちは責任の擦り付け合いやさらに上に上るために賄賂を流すようになるのである。組織という形をとる以上仕方ないことである。だからこそ解放軍リベリオンという組織が管理してやろうと考えているのだ。

「ということほだ、相手は少数である。私がやろう」

大男がそういうと場が安心したように弛緩した空気に包まれる。つまるところ、皆我が身がかわいいのである。

が、次の瞬間、

——ピカッ!!

「うぐっ!!」

「なんだ!!」

「うわっ!!」

一瞬、この場に光が満ち視界が遮られる。そして、

「ガフツ!!」

「ギャツ!!」

「ヘアッ!!」

何人かが首から血を流し倒れる。首筋に一撃、即死である。

その中で大男は、

「ふんっ」

自分の能力である“硬化変質”で後ろからくる首元の攻撃をはじく。

「っち」

攻撃した本人は大男から距離を取ると姿を現す。

「…《貌フェイスレス無レスき婦人マダム》か。これはどういうことだ……」

そこにいたのはイングナ。当然、このアメリカ支部を統括する立場である大男からすれば見たことのある顔である。

「今忙しいのだが。そして、どう弁明するつもりだ」

大男からすればなんでこのタイミングでこの女が動いたかが不思議である。これまで特に何か彼女に反逆されることをした覚えはな

い。

イングナは片手に持っていた資料を床に投げ捨てる。

「それ。アンタ、身に覚えがあるんだろう」

大男がその紙を見ると顔がゆがむ。

「…ばれてしまったか。それで、今回こんな暴挙に出たと」

大男が動じないことを見てイングナはキレる。

「バレた…。ああ、ようやく知ったよ。アンタらがゲスの集まりってことにな!!なんで妹を巻き込んでいる!!!契約と違うだろうが!!!」

イングナの投げ捨てた紙には、妹であるエレナに投与されている毒薬の種類、量が載っている。その薬は体に積極的に影響の出る薬ではないが中毒性を含んでおり、体の機能を徐々に停止にむかわさせる効果があると記されている。

つまり解放軍はイングナと契約したことを違え、エレナを投薬による薬漬けにしているということである。

大男は少し間を置き話し出す。

「…。お前、《貌無き婦人》フエイストレス・マダムは自由にしておくには危険すぎた。お前ほどの能力を持つものを国際騎士連盟の勢力につかせるわけにはいかん。妹はその楔だ」

イングナは簡単に光学迷彩という人の目を欺く能力を使っているが、透明化の能力など便利で優秀すぎるのだ。今のよう暗殺に利用すれば相手に気付かれず殺すことができるし、他にもさまざまな用途が考えられる。特に裏社会、犯罪側では察知されてはいけない取引をするときなどに是が非でもほしい能力なのである。そのような能力を持った人材をフリーにしておけない。

つまり解放軍は、イングナを縛り付けておくために妹であるエレナを使ったのだ。

そのことを知りイングナの脳内は後悔に満ちていた。そういえば思いつく節はいくつもあつた気がする。

両親が死んで一時期体調を崩すことはあり得るにしてもその後の回復がいくらなんでも無さ過ぎた。さらに、解放軍の誘導リベリオンだろう仕込

みで面会できる機会が少なかったのだ。

——もつと、エレナのことを考えてあげていけば

——もつと、自分の立場を自覚していれば

そんな考えをしていたからか、大男がこちらに突進してきていることに気付くのが少し遅れた。

「あつ、きやあ!？」

大男の能力は“硬化変質”。自身の体を鉄のように変質させる能力である。そんな能力を発動している人のタツクルを受け止められるほど、イングナは力がない。吹き飛ばされ、壁に激突する。大質量を持つての突進は、魔力によるブーストも加えとてつもない威力を持っていた。

イングナが飛びそうな意識を必死に保っていると大男は話し出す。

「それよりいいのか。貴様が反逆すれば妹は無事ではすまんぞ」

そんなことは知っている。だが、ここで自分がこの男に敗北すればもう自分たちは明るい人生を送れない。自分は解放軍リベリオンに利用され続け手を血に染めるようになるだろうし、妹も薬の効果がどうなるかわからない。さらにひどいことになるかもしれない。そんな未来は、

「認め、られない、ん、だよお…!!」

壁から体をはがしやつとの思いで立つ。さっきの衝撃で大半の魔力を持つていかれたうえ、体も何か所か骨折しているかもしれない。いや、骨折しているだろう。腕から出血もしているしこれは長く持たない。

せめての反撃で光の弾を全方位360度から打ち出す。男ごと煙に包まれるがこれくらいで倒せるとは思っていない。自分の姿を消し、手にデバイスフォトンブレード、『光 剣』の柄を握りこむ。イングナのデバイスは普段は柄しかないが、イングナが魔力を込めると光の刃が出てくるのだ。気分はライトセイバーである。

煙が晴れないうちに大男に向かって走る。今度は正面から、人体である以上構造上柔らかい部分があるはずなのである。ならばっ——

「はあ!!」

煙が晴れ、自分をとらえられていない大男の目に向かって光剣を突き出す。男は防御姿勢も取れえていなければ、回避行動もとっていない。

——とった

男の目に、光の刃が突き刺さ——

らなかった。

この男の伐刀者^{ブレイザー}としての能力は、簡単にまとめれば“硬化”である。それが、全身に及んでいるに過ぎない。この男に硬化していない部分はないのだ。

男は自分の目に攻撃があったのを察知し蹴りを入れる。イングナに接近戦の心得があるはずもなく、なすすべもなく吹っ飛ばされる。多分、あばらの骨はほとんど折れてしまったかもしれない。

もう立ち上がれない。

魔力での防壁があるとはいえ、相手も魔力をまとった攻撃をしているのでさして防御面にプラスになるわけではない。しかもこの男の魔力はまだつきることはなさそうだ。この地区の解放軍^{リベリオン}の人員の中で唯一のAランク相当ということはイングナは知らないがAランク相当の実力であることは分かった。自分ではかなわないことも。

だが、

「…だ。…まだ、た、たか、える……」

イングナは口させまともに動かせないのを自覚しながらあきらめることをできない。

今まで自分は、妹に対して姉らしいことをしてあげられていない。それだけではなく自分のせいで迷惑までかけてしまっていたのだとやつと分かった。

だから、妹^{エレナ}の自由のために、そして、自分の未来^{じんせい}のために…!!

大男は器用な方ではない。

どちらかと言えば自分が不器用な方だと理解している。解放軍^{リベリオン}に所属しているが、チンピラのような人員が増えていることに彼は不満があった。

もともと解放軍リベリオンは今の腐った社会を変えるために作られた組織だ。決して、テロや虐殺などのために作られた組織ではないのである。

そんな中、久しぶりに人間として尊敬できる人物に出会えたかもしれない。

妹のために敵うはずもない相手に向かって、動けないほどのけがをしながらあきらめないその精神力。称賛に値する。

このあと、自分が他の解放軍支部リベリオンに移動し監禁することになるだろうが、大男は久しぶりに手ごたえのある戦いだったと感じた。

大男がイングナに近づく。そして、その手がイングナに触れようとしたとき、

「——っふ」

大男は衝撃を受けながら何らかに吹っ飛ばされた。



さて、イングナに資料を渡した後の話なのだが、将季は自分がイングナの妹の救出に向かうと言った。

「でも、いいの？あなたは…」

「もとよりテロリストなんて気に食わないし、今回みたいな下種のやり方はもつと気に食わないだけだ。それより、一人で突進なんて無謀だぞ。解放軍リベリオンにも強いやつはざらにいる」

将季は戦いを愉しむのが一番の目的だったが気が変わった。

今回のような外道なことを見逃しておけないし、なによりその妹さんとイングナはよくある暗部に巻き込まれた人なのだ。

自分から染まっていった人との命のやり取りをすることに愉しみを覚えるが、巻き込まれた人と戦いたいと思ってなどいない。

問題はイングナが一人で支部に突撃するという点だ。このアメリカ・ニューヨークに存在する支部に伐刀者ブレイザーがいらないことはあり得ない。

将季が潰した支部には高くてもBランク相当の人物しかいなかったが（Bランク相当な時点でおかしい）、Aランク相当の人物がいてもおかしくないのだ。それほどに解放軍リベリオンという組織は大きくなっている。

だが、

「問題ないわ。一撃必殺は私の得意分野だし、それに、」

イングナは手を血が滲むほど強く握りしめる。

「自分の不始末は自分で片付けるわ。もう、決して間違えないように」
イングナが折れないことを知った将季は、せめての条件を付け足す。

「なら、俺が送って行った三十分後に襲撃を開始してくれ。そのくらい待ってくれてもいいだろう？」

三十分では妹の場所までたどり着けないかもしれないが、猶予がないよりましだ。

イングナは渋々だがそれを承知した。

将季が自分のことを心配してくれているということは分かっているのだ。だから、その気持ちをくんだだけ。

その気持ちをくんだことがイングナの助かった理由なのだから、天はまだ姉妹を見逃してはいなかったということだろう。

☆

将季はほう、と息を漏らす。

三十分、この時間でここまで来るのは自分でも大変だった。最も、自分の能力はこういうことに向いていることは分かり切ったことなのだが。

「しよ……う、き。え……れな……は？」

イングナは霞む視界で将季に問いかける。

「ああ、お前から借りた車の中にいる。多分病気の類はもう患ってい

ないが、薬の禁断症状が出るかもしれんからちよつと気絶してもらっているが、無事だ。」

イングナは全身から力が抜けるのを感じた。

妹は助かったのだ。まだ薬などの効果はあるかもしれないが、一歩普通の生活に向けて進むことができたのだ。

がらがらと瓦礫をどかす音がする。

「お前は何者だ……」

大男は将季に向かって問いかける。

支部の壊滅はイングナが行ったことかと思っただが、自分を吹き飛ばすなどただの伐刀者ブレイザーにできるとは思えない。

「なに、通りすがりのお節介だ。気にするな」

将季と大男は相對する。将季は相手の能力がなんとなくであるが分かった。

蹴った時に返ってきた反動が普通の人とは違ったのである。おそらく、何らかの方法で体重を増やしているか自身の体を変化させる能力なのだろう。

将季は攻略法が見いだせない。自分の体を純粹に強化する能力なら吹っ飛ばした時点ではがをしていようが、相手に負傷は見られない。

そして、自分が銃を撃つたり剣で切ることができるが、漫画見たく斬鉄ができるわけではない。もちろん、ただの鉄なら斬り裂けるがブレイザー伐刀者の能力なのだからさらに強度は増していると思われる。将季はまだ鉄で鋼鉄を斬り裂ける技量は持っていない。銃で撃つても無効化されそうだ。

さらに、八極拳は無意味だろう。先ほどの蹴りは浸透勁を打ち込んでいたが、大男は全く堪えた様子がない。

つまり、将季は決め手に欠けている。

「そうか。では、お節介は消えてくれ」

大男はチャージを仕掛ける。

もとよりこの身は全身が硬化している。文字通り全身余すところなく、体の表面はもちろん体内も硬化しているのだ。だから将季の蹴りも効いた様子はない。

そして、アドバンテージは大男にある。将季の能力は分かっているが未だに使ってきてない時点で自然干渉系ではないだろう。他にも攻撃的な能力は除外される。となれば、補助系の能力か攻撃には利用しがたい能力なのだろう。そんな人間はありふれているし、男に敗北という二文字はなかった。

将季は当然、大男の攻撃を避ける。ために銃弾打ち込んでみたがすべて弾かれた。魔力でできているので通るかと思っていたが、相手の防御能力はなかなか高いようだ。

大男はチャージをさらに仕掛ける。攻撃が一発決まればこの大男の勝ちだ。将季が身体能力を増強させる能力を持っていたらとづくに使っているだろう。それが無いということは相手は自分を受け止めるための力がないということ。つまり自分の攻撃は相手にクリティカルに効くということだ。

今まで多くの騎士を打ち取ってきた男にはそれが分かった。だからひたすら攻める。相手に選択できる札の種類を限定させるためにも。

「しかたない…か……」

将季も覚悟を決める。

目の前の男に浸透勁が効かない以上《矛盾^{コンフリクト・ブレイク}破壊》程度の衝撃では意味がないだろう。あれは防御不能という点は長所だが、金属を破壊するほどの威力はない。人間の身に対しては有効だがこういう手合いにはまったくもって無意味な攻撃だ。

もとより強者との死合いは将季自身が望んでいたことだ。イングナには不謹慎だが笑いがこみあげてくる。

「なにがおかしい」

大男も将季の空気の空気の变化を感じ取る。

「いや、こんなところでこんな強者と出会えるとは思って無くてな」

将季が能力を発動し距離を引き離す。この時点で相手に能力が割れたが問題ない。

将季が自身の体にかけている封印を解き放つ。
その瞬間、

「…な!？」

推定Aランク相当の男が驚くほどの魔力が、将季から発せられた。

——魔力が増えることはあり得ない。

この事実について。

この世界の伐刀者^{フレイザー}は、《総魔力量^{オー}》と呼ばれる魔力の総量が決まっている。

これは特訓でどうにかなるものではない。この世界に生まれ落ちた瞬間から、その人物の持つ運命の重さに比例する量であると言われている。

そしてその言葉を表すかのごとく、歴代のAランク騎士は一人の例外もなくすべてが歴史に名を刻むほどの大英雄である。

これは覆ることのない事実である。

では、なぜ将季は今Aランク相当の魔力量を持つ大男が驚くほどの魔力を放っているのだろうか。

理由は簡単に二つ存在する。

まず、将季は自身の真の能力で常時放っている魔力をBランクまで抑えていた。これを知っているのは黒鉄家の当主である黒鉄厳^{イツギ}と、兄である王馬くらいである。弟である一輝も、妹である珠雫も知らされていない。将季の《総魔力量^{オー}》はAランクのものなのである。歴史で一番の《総魔力量^{オー}》をもつステラには及ばないが、並のAランク騎士よりかは多い魔力量を所持している。

しかし、これだけでは推定Aランク騎士が驚くほどの魔力は放出されない。今の将季の放っている魔力はあのステラよりも多いのだ。

そこで二つ目の理由だが、今まで封印を施していたということは魔力はどこに消えていたのだろうか。封印していたとしても魔力は満タンでなければ常に生み出されるものである。でなければ、伐刀者^{フレイザー}は能力を使うことなどできない。

ということはだ、常時魔力を一割ほど減らしておけば、体が魔力を補充するために魔力を生み出すということだ。将季は封印で70%

の魔力で生活していた。その一割、常時減っている状態を保つようにしていたので将季は自身の合計魔力量の平均63%の魔力を維持するように心がけていたということである。という事は、彼は常時魔力をためていたということになる。

そして最後に、彼の能力は反する理をつかさどる能力なのである。

☆

大男は目の前の少年と対峙して、自分ですら気づかないうちに後ずさりしていた。

大男の反応は当然だろう。この変化は例えてしまえば、狼と鷹が勝負して、空にいる鷹が有利かと思っていれば、狼が空を走ったようなものだ。彼がどのように魔力を封じていたのかは分からないが、この圧倒的魔力の圧力を前にして平静でいられるほうが希少である。

大男は思考をマイナス方向に走らせないように考え続ける。

(あれは少年の攻撃が俺に通じないという証明だ。魔力量が増えても決定力に欠けている点は変わらない。なら、これ以上妙な真似をする前に叩き潰す：!!)

大男の考えていることはもつともだ。

将季は自分の攻撃が通じないと感じたから魔力を解放したし、魔力が増えたからと言って攻撃手段が増えるとは限らないのである。

だが、将季は能力を限定的に使っていた。

将季は拳銃型デバイスである『はるか花火』を取り出し銃口を向ける。

大男は自分の体と霊装である西洋剣ブレイドを硬化することしかできないので、将季がすることを黙ってみているしかない。いや、今この瞬間直観で将季を危険だと判断し、初めて全速力で将季のもとへ向かっている。

将季が引き金を引く。

——その銃弾は、

——硬化している男の体を容易く貫通した。

「ガッ…!?!」

大男はひたすら疑問を浮かべる。

なぜ、さつきまで簡単にはじくことができた銃弾が今度は自分の体を貫いた…？魔力が増えたとしても威力が爆発的に変わるわけではない。今貫かれた脇腹も、硬化の硬度は全身どの箇所とも変わらない。Eランク相当から今のAランクでもトップクラスまで魔力が上があれば別だが、今の彼は先ほどまでの140%ほどの魔力量だ。

自分の体を貫くからには別の要因が存在する…。

将季は銃を下す。

そして、疑問符を浮かべている大男に向かって話しかける。

「不思議だろう？なんで硬化している体をただの魔力弾が貫いたか」

大男は、今は時間と情報を引き出すことが先決だと判断し話に乗る。

「ああ、種があるならぜひともご指導願いたい」

将季は体の力を抜き壁に寄り掛かる。

「簡単さ。距離を操作するのは俺の能力の一部でしかない。俺の能力はこんな能力さ」

将季は最後の言葉と共に指をならす。

その瞬間、

——世界が一変した。

「な!?!?!」

大男の驚きの声が響き渡るの
前後左右上下全てが黒い、無の空間。目の前の少年と自分の二人しか存在しない完全な異空間。

「俺の世界にようこそ、ってね。この空間はすべてが反物質で出来ている。一種の別世界ともいえるな」

将季は簡単に言っているが大男の驚きは止まらない。

世界

この場所は本当にひとつの別空間なのである。そんな存在を創り出す伐刀者^{ブレイザー}なんて過去現在のすべての能力者をかえりみても一人も存在しない。

いわば、彼はこの世界の王。

この世界を掌^{つかさど}る絶対的存在なのである。

反物質

その存在は確認されているが発生させることができない物質と言われている。

原子が陽を帯びている陽子と負を帯びている電子、そのどちらも帯びていない中性子で出来ている物に対し、反物質は陽子が負、電子が陽を帯びている架空の物質なのである。

電子の数が少ない原子では確認されているが、徐々に原子の質量が増えていくと、その物質は存在できない。

だから、架空の物質。

そして、反物質は現実の理の反対の理で成り立っている。

現実で硬いものならば柔らかく、重力が働かなくなり、距離が保て

なくなる。そういう理を持つ“概念”なのである。

将季の能力を従来の能力の分類に当てはめると、自然干渉系能力にして概念干渉系能力。いや、この場合概念より“因果”に干渉しているのかもしれない。現実と真逆の存在となる“因果”を持つ物質を操る。これが将季の本当の能力だった。

距離を操作するのは、反物質で距離を“存在していない”ことにしたにすぎない上に、《矛盾破壊》コンフリクト・ブレイクに至っては物質と反物質をぶつけた衝撃波でしかない。

つまり、将季の本当の能力行使はつきつきからということである。

将季が普段この能力を使わない理由は簡単。

勝負を愉しめないから。

体術がおろそかになるから。

勝負を愉しむというのは将季の生きがいだし、体術は修めなくてはいけないと思っていた。でなければ某とある世界の幸薄少年のように、左手で能力を打ち消すような伐刀者ブレイザーに出会ったとき勝てないからである。将季の本質は、戦闘狂にして強さへの渴望と言えるだろう。

そして、この能力を解放した将季は負けを知らない絶対的覇者である。

故に、大男に勝機は無かった。

☆

その後の話は簡単だ。

イングナと妹を会わせるとイングナは安堵し、自分の全精神力を使い果たし気絶する。

これでニューヨーク、ひいてはアメリカに来た甲斐があったと感じ、久しぶりに故郷である日本に帰ることに決定。

日本でイングナの怪我の治療のために、本家でアイピーエスカプセルiPS再生槽を借り治療。

薬によって体に悪影響があったエレナを反物質を利用し治療(?)。完全に作用が消えたわけではなかったが、その後も継続して薬に値する存在を“反転”することによって、今では影響は完全に消え去った。

大男、名前はライブル・カツシュという。については、俺のよいらイバルになることを期待し八極拳の道場に放り込んだ。その後、道場から悲鳴が聞こえた気がしなくてもなかったが、定期的に連絡しているので無事なんだろう。社会奉仕活動に参加させたりもしているが、未だに国家に対して反抗心は存在するのでそれはそれで認めている。権力の在り方に対して納得できないなんてどんな人にもあることだし、彼の場合それに対する行動の仕方が大きかったというだけだ。彼自身、エレナに投薬することには一切関わっていなかったようなので、ライトベル姉妹ももう恨みは無いようである。

その後、姉妹は俺に助けられたということ、俺の旅に一緒に行きたいと望んだ時には少し困った。この時に初めて、親父に海外へ渡れるパスポートを作ってもらいそれをまともに使い始めた。

そういうことで、彼女らとはかなり長い付き合いになっている。俺と一緒にいる時間は彼女らがぶっちぎりで一番だろう。

☆☆☆

「ふく。歌った歌った!!」

エレナが満足そうに言う姿をみて微笑ましくなる。やはり子供は元気に遊んでいる姿が一番似合う。

イングナは若干燃え尽きた感覚があるが、放っておけばそのうち立ち直るだろう。彼女の音痴が治るといふ奇跡の日は当分来ることはなさそうである。

そうして歩いていると、小さな粒が目の前を通って行った。

「あつー雪だ!!」

一番早く気付いたのはエレナ。さすが、子供はよく見ている。空を見上げると雪がぽつぽつ降り始めたところだった。

今日はホワイト・クリスマスになりそうだ。

辺りの人も、ライトの中に降る幻想的な光景に見入っているようである。

「ねえ、この後どうする?」

イングナが尋ねるので少し考えるが、今日くらいは贅沢してもいいだろう。

「どっかレストランでもいくか。俺が持つよ」

そういうと姉妹は目を輝かせる。

「じゃあケーキ!ケーキ食べたい!!」

「まあケーキはいいけど。どこか洋風のレストランでも行きませんか」

二人ともすぐに食べたいものが出てくるあたり、似た者姉妹なのかもしれない。

「シヨートケーキと、チョコレートと、モンブランと、あとあとチーズと……!!」

「えっと、ここの近くだと…。あつた、将季、いくわよー!」

休日くらいは、この騒がしい似た者姉妹と過ごすのも楽しいと感じる。

幻想的な風景を眺めながら、二人をゆっくり追いかけていく。

この世界の日常

「さあ!! 今日も今日とて我らの戦いは続きます!!」

競技場にマイクからの声が響く。

その声はドームの各地に設置されているスピーカーから響く。ドームは半球状に出来ているので天井が高くできており、外周に近づくほど天井が近い。そのことから円状に外側に存在する観客席は比較的上を見上げればすぐに天井を見ることが出来る。そのいたるところにあるスピーカーが互いに音を反響させて、一つ一つが実際に発生させている以上の音量を観客へ届けている。

そのドームの中央には二人の人影。

それぞれの手には得物、つまるところは相手を傷つけるための道具が握られている。

片方の男の手には武骨な日本刀、無駄な装飾は無く、本当に敵を切り裂くということに重きをおかれた刃である。

もう片方の女の手には手を保護し、相手を殴るナックル、拳打の攻めに特化するその武装を所持するのは小柄な少女。その姿はそのような物騒なものを持つような物ではなく、オシヤレが似合うような可憐な姿をしている。

が、

「黒鉄君だよね!! アタシの名前は兎丸恋々っていうんだ! ヨロシク!!」

同時に活発そうな姿もしている。

服装は下が足の動きを全く妨げないような超短パン、俗に言うブルマのような物を履いている。上は当然のごとくノースリーブ、脇が全て観衆の目にさらされるような少しばかり目に明るい格好である。

彼女の肌は目に映るすべてが日によく焼けており、活発かつ健康な肢体が多く、男たちの目を引き付けて離さない。

「知ってますよ。というか、この学園であなたを知らない人はいないでしょう？この学園最強の集団、生徒会四人のうちの一人、速度中毒ランナーズ・ハイの兎丸さん」

そう、彼女こそがこの学園でトップ5、片手の指に入る実力者と言われるほどの使い手であり、生徒会のメンバーでもある兎丸とまるれんれん恋々である。

なお将季も生徒会に誘われたことはあるのだが、仕事がめんどうだという理由で断った。強者という一点では文句無しなのだが、責任ある立場に縛られるのは御免という結論になったのだ。特待生として入学してもらったという学園側の妥協もあり将季の機嫌を損なわないうように、入るということは強制などもされず将季は一般生徒のままである。

「いや〜、黒鉄君みたいに強い人と戦えるのは嬉しいかな。正直お兄さんの方は強すぎてね……。アタシは近づくことも出来ないのだ」
「アハハ、僕も本気でやられたら無理ですから……」

あの兄の能力は継戦能力と言うか、生存能力については本当にチート染みている。

あの人が本気で戦うとしたら確実に近付けない、剣を当てることが不可能だ。そもそも彼我の距離を単純に数キロメートル離されればそれだけで詰む。例えれば戦闘で絶対に敗北しない能力とも言えるだろう。流石に因果操作系の能力者には負けるかもしれないが、自力も高水準のあのハイスペックな存在に勝つ姿があるというビジョンがなかなか見つけられない。

長距離ロングレンジの攻撃を持っていたとしても、その射程範囲まで近づけな

い。しかも本人の攻撃は射程距離無しと来た。彼は対象が見えて、空間が連続して繋がっていれば確実に攻撃を通せると言っていた。流石に壁やガラスを隔たりすれば攻撃を通すことは出来ないが、それでも十二分に強力な異能^{チカラ}である。避けることは可能だが、一方的に攻撃を続けられるのは精神的に辛い。というか永遠と避けることは肉体に貯まる疲労的に不可能である。ほんとどういうラスボス性能をしているのだろうか。

「ああ、そういえば黒鉄君は同年代なんだろう？敬語とかは気にしなくていいぜ？」

「そうかい？じゃあ、そうさせてもらおうよ」

『さあ！そろそろ試合開始時間です!!解説の将季さん!この試合はどう見ますか!?!』

『いやあ、負けたら我が弟をしごき直さなきゃいけないよね』

何故かこちらが危険を一身に背負っているような気がするのだが気のせいだろう。目の前、対戦相手の女の子さえこちらへ憐憫の目を向けているのは気のせいなのだ。……そう、思いたい。

初日からずっと、将季は一輝の試合があるスタジアムの解説役を引き受けていた。

同年代の騎士の解説ということで見聞感を持つことが出来るし、そもそも彼以上に武芸に秀でているものは世界中を眺めても少数しかない。そのレベルの人物なのである。三歳の頃から剣を振り続けているのは伊達ではない。

まあ、兄が何を言おうが自分には関係ないことだ、と一輝は意識を切り替える。

——どちらにしろ、自分は負ける気は全く無いのだ。

意識を研ぎ澄ます、ここからは戦闘だ。

「おっ？・やっぱり、いいネ……!!」

あちらも意識をこちらに集中、外の音が二人の間からは消えていく。

『試合開始いい!!!』

その瞬間から、二人は他の全てを置き去り、動き出す……!!

☆

この試合で一輝が気を付けることはそう多くない。

兎丸の能力は特に一輝にとって脅威ではないからだ。

兎丸の能力は確かに速い。だが、それだけだ。武芸に通じている人が集中して見れば目で追うことも出来るのだ。ある程度の距離を取っていけば、一輝レベルの武術の達人ならば集中していれば空気の振動の変化で攻撃の瞬間を感じ取ることまで可能なのだ。

だが、あえて一輝は相手に向かって自分から突っ込む。

兎丸が弱いと言っている訳ではない。むしろ、兎丸の実力は同年代の騎士ではトップレベルだ。だてに生徒会の一員に選ばれている訳ではない。その実力が買われて生徒会に抜擢クハクされているのだ。

相手が近接戦闘型の騎士ならば、自分の間合いクロスレンジで負けることはでき

ない。速さ特化の、学生騎士の中ではトップレベルの実力の持ち主が目の前にいるのだ。

ならば、その速さに対抗してやろう!!

兎丸は試合開始と共にその場で小さなジャンプを刻み始めた。

自分の速度は時間が経つにつれて最高速に近づいていく。

ならばその速度に到達する前に攻略するという戦い方が、自分に挑んでくる相手の心理だろう。その想定通り、対戦相手の黒鉄一輝はこちらに向かって突っ込んでくる。
だが、

(そんな当たり前のことに対策していない訳ないよね……!!)

恋々として生徒会の一員、日々上を目指して努力を続けてきているのだ。

一輝に向かつて突っ込む

普通に走り出す速度も普通の相手ならば十分だが、恋々は化け物を知っている。

黒鉄将季

あれは本当に何なのだろうか。

近距離用の抜刀絶技ノイブル・アーツの持ち主でもないのに近、中、遠距離全ての戦闘に秀でている。

近、中距離は自分の固有霊装デバイスで対応可能、遠距離は能力で完封。近距離での戦闘は刀術、これは黒鉄家で雇われた師範に通り習い終

わってからも自身で改良を続けている。中距離戦での銃術、これは魔力でできているからか射撃の反動も小さく、狙いをしつかり固定して射撃すればよい。遠距離は能力での無双。

本当にラスボスかよと言いたくなる。しかもまだ現在も戦闘に關しては成長しているそうだ。彼はどこを指しているのだろうか。

そして、目の前の相手はその化け物の弟だ。それも実力的に目を掛けられているレベルの。その男が弱いわけがない。なぜ留年したのかは詳しく知らないが、その実力はこの学園の中でも上位に入るのだろう。

一輝の正面から接近すると彼は剣を体の横に構える。それが当然の対処だ。自分に向かって今の勢いのまま剣を振り切れればその分のスピードが剣のエネルギーに変換されるのだから、体を一刀両断するには十二分な力を斬撃に乗せられる。

だが、甘い。

「っふ!!」

「!!」

——急加速

その場から一瞬で100キロ程加速した兎丸は、一輝の後ろでUターンする。

一輝はその動きに目が付いていかない。

単純なことだ、人間の脳は急な変化に弱い。ただ、人間の反応速度では反応しきることが不可能な加速をしただけである。

当然だが、この技術にも欠点が存在する。

加速するだけであって、細かい走路の決定が出来ないのだ。急な加速は自身に大きな負荷をかけることや、自分の意識が未だについていけないこともあり、加速しながらの攻撃などは未だにできない。

だから、一輝の後ろに回り込んだ。

相手の視界の外に入っているだけで得られる戦闘でのメリットは多い。人間が周りの状況を把握する際に視認情報を頼りにする割合は、一般的に80パーセントと言われている。それだけ、相手に情報を与えないということだ。訓練しただいでその割合は変わるが、それでも視覚による情報入手の量は非常に多い。

そこからドームの円状の周に合わせて加速を続ける。黒鉄一輝と戦うのは自身の最高速に乗ってからだ。

それは彼と言う一騎士を認めているから以外に理由がない。

一輝は兎丸が加速に入ったことを理解した。

その速度に追いつくことは自分では不可能だ。いくら武術を修めたと言っても人間の肉体的に成長限界点は存在する。人の出せる速度に限界はあるし、兎丸の場合それを魔力を駆使して超えているだけだ。魔力の少ない自分がその手段をとることは出来ない。

そして、あの急加速は今まで使用したことは無かった。つまりこちらに過去、今まで晒していなかった手札を晒したということとはそれだけこちらを認めているということだ。それだけで非常に嬉しい。

だが、今回の勝負は自分も負けられない。

一輝はその場にとどまり、目を閉じて集中する。

視覚が情報入手手段のほとんどと言っても、聴覚や触覚を侮ることは出来ない。その感覚を研ぎ澄ませば視覚に頼らずとも日常生活を送れるようにもなるのだ、武術を修める者にとって聴覚は必ず重要視されるものである。

兎丸の走っている場所は音で判断をすることも出来る。速度は超一級だが、自然と発生してしまう足音を消すことは出来ていない。あえて視覚を遮ることで、聴覚から情報を取り入れることに集中する。

——やがて二人が交差し、

——この試合の決着がついた。

☆

「今日もありがとうございました〜!!」

「おう、また次回な」

将季は解説担当だった放送部の生徒に手を振りながら道を歩く。

今日も一輝の連勝は止まらなかった。

対戦相手が生徒会の一員だということと校内では連勝もここでストップだろうという話が流れていたが、そんな噂は知らんとばかりに今日も危なげなく快勝したのだった。

決め手は将季の知っている勝ち方とは変わらなかった。

接近してきた兎丸の服を掴んで回し投げ、地面にたたきつけて気絶させ終了。スタートの動きが違っていたので何か変わるかとも思ったが、やはり斬ってしまえば相手の命に関わってしまうという考えがあるのだろう。

(その辺の認識はまだ甘いかな)

将季は本当の戦場と言うものを良く知っている。外国を回る際に危険に陥ったことや自分から突っ込んでいった回数や両手の指では

足りない、というよりも